



馬新貽総督の暗殺とその共犯者を追う

緒形, 康

(Citation)

神戸大学文学部紀要, 48:1*-73*

(Issue Date)

2021

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81012695>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81012695>



馬新貽總督の暗殺とその共犯者を追う

緒 形 康

一 白昼の凶行

一八七〇年八月二二日（同治九年七月廿六日）、両江總督の馬新貽が江寧にある總督本部前通路で張汝詳に刺殺された。それは恒例の軍事射撃演習の閲兵式が終わったばかりの衆人環視の中で起こった。大清帝国史上、空前にして絶後の暗殺事件であった。

軍事射撃演習は、總督本部の西側にある演武場で一般に公開される恒例行事である。八月二二日に予定されていた演習は、大雨で二二日に延期されていた。演習が終わると、總督は通路から本部裏門へ徒歩で移動した。ロープが張られた通路の両側は、總督を一目見ようとする群衆で一杯であった。馬新貽を護衛したのは、督標中軍副將の喻吉三、武巡捕都司の葉化龍、同把總の唐得金、差弁守備の方秉仁、劉雲青、同把總の朱信忠、武生の潮枝桂、千総の費

善樂、馬兵の冉雄彪、王長發、蔣金鼈の計十一名。裏門の手前まで来たとき、馬新貽の前に一人の武生が膝間付いて身元不如意を訴え始めた。葉化龍が速やかに男を拘束し、唐得金が誰何に及んだ。（後から判明したところでは、男の名は王咸鎮、山東の鄆城の出身で、馬新貽と同郷の誼で陳情に及んだと言う。¹）王咸鎮を退けて、総督が二歩前へ出たとき、今度は別の男が叫び声を挙げながら馬新貽の身体にぶつかった。方秉仁がすぐさま男の辮髪を掴んで、馬新貽から男を引き離れた。総督の制服の中には小振りのナイフが見えた。方が男からナイフを奪うのと、異変を知った後続の中軍が男を捕縛したのは、ほとんど同時であった。護衛たちは顔面蒼白の総督を抱えて本部に入った。馬新貽の右の脇腹からは血が大量に流れていた。総督は翌日、絶命した。

江寧將軍の魁玉は、江寧布政司の梅啓照と塩道の凌煥を通じて、総督刺殺の報に接すると、直ちに現場検証を行い、同日付で捜査班を立ち上げた。それは、梅啓照と凌煥の他に、江寧知府の馮柏年、江寧知県の莫祥芝、同候補知府の孫雲錦、同候補知県の沈啓鵬、上元県の臨時知県の胡裕燕をもって組織された。二三日に馬新貽が死亡すると、捜査班はさらに増員され、江寧按察司の賈益謙、候補道の勒方、候補知府の錢海永、皖南道の李榮、江蘇候補道の孫衣言、山東候補道の袁保慶が加わった。事件の第一報は二三日、宮廷に打たれた。「同犯は、河南人で張汶詳と言う。刺殺に至った事由について、供述は一貫しない。²」

八月二十九日、魁玉の事件第一報を受理した北京宮廷は三つの上諭を発した。宮廷は、直隸總督の曾國藩を馬新貽亡き後の兩江總督に異動させ、曾の後任の直隸總督には湖広總督の李鴻章を任命した。曾國藩の赴任までは魁玉が兩江總督を兼任することとする。また、六月に勃発した天津教案の解決の目処が立っていない状況下で、英仏列強の軍事的脅威を避けるために、長江の防衛を最重要課題とすべきである。安徽巡撫の英翰の提案に基づき、湖広總督の李鴻

章、江西巡撫の劉坤一、湖北巡撫の郭柏蔭ら沿海地域を管轄する巡撫が協力して、湖北、江西から臨時の軍隊や食糧を天津や南京へと供出する態勢を整えよ。³

九月五日、宮廷は、事件が「決して一人の犯行ではなく、恨みを含んだ共犯がいることは明らかである」と改めて述べ、漕運総督の張之万を、魁玉に次ぐ責任者に抜擢し、事件の捜査班に加えるよう求めた。⁴

九月二四日、魁玉は詳細な事件の調書をまとめた。要点は次のごとくである。

張汶詳の籍貫は河南汝寧府（今の汝南）。現在は浙江寧波府にて貿易業を営む。咸豐十一（一八六一）年に太平天国の侍王李世賢の下に投じ、安徽、江西、広東、福建、浙江の各地を転戦し、福建の漳州府攻撃に従事した。馬新貽刺殺の動機について、同犯は頑として供述を拒み、これ以上拷問を加えれば、その生命を奪う恐れがある。単独犯ではなく、首謀者がいたのは間違いない。家族の内情を秘して語ることがないのは、首謀者に配慮するところがあるからだろう。その妻はすでになく、子女三人は現在、浙江湖州府新市鎮に在住。この情報提供を受け、新市鎮を搜索の結果、その子女らの身柄を拘束した。⁵

九月二五日、張之万は吏部の辞令を受理し、三〇日に勤務地の清江浦を出発、京杭運河を南下し、一〇月七日、江寧に到着した。漕運総督所管の業務は、記名提督淮陽鎮総兵の歐陽利見、記名提督の張從龍、姚広武に一任した。

張之万の第一調書は一〇月一二日に提出された。張汶詳の調査に大きな進展はない。だが、張が太平天国に属したときの仲間の一人、時金彪が山西で従軍していることが分かり、山西巡撫の何瑱に連絡して、江寧まで重要参考人として護送するよう依頼した。⁶一〇月二二日には、事件当日に馬新貽の護衛に当たった十一人の職務怠慢が告発され、彼らの職務を解任の上、尋問の対象とする事が決せられた。⁷張之万と魁玉による第二調書は二月一三日に提出さ

れ、幾つかの新事実が明らかにされた。

張汶詳は太平天国から離脱した後、浙江南田の海盜集団に加わった。馬新貽が浙江巡撫在任中のことである。妻の羅氏が海等仲間の呉炳燮に誘惑され、出奔した。馬新貽總督が地方視察の途次、寧波を訪れたさい、張汶詳は、呉の悪行を列挙した控訴状を總督が乗る公用車（駕）に投げ入れたが、その訴状が審理に付されなかったため、張は馬新貽に遺恨を抱いた。逃亡中の海盜である龍啓濤たちに、馬新貽を殺せば妻を奪われた個人的恨みを晴らせるだけでなく、海盜の仲間の復讐も果たせると言われて、暗殺へと心が傾いた。その後、寧波から湖州の新市鎮に移り、非認可の質屋を開いたが、馬新貽がその暴利を取り締まるため質屋の閉鎖令を出したため、巨額の利回り損失を出し、暗殺の決意がいよいよ固まった。同治七（一八六八）年と八（一八六九）年に杭州と江寧の間を何度も行き来し、犯行の機会を狙ったが果たせなかった。本年八月二二日に及んで、ついに暗殺の初志を遂げたのである。

しかし張之万は、事件の首謀者の存在を明らかにできなかった。北京の宮廷は、報告を受理した二月二三日に、次のように申し渡した。この供述に基づいて正式の訴訟手続きを進めても、結論を得ることは難しい。曾國藩の赴任を俟って再審議を行うこと。さらに刑部尚書の鄭敦謹をも江寧に派遣し、曾國藩とで共同審査を進めれば、より良い結果が得られるであろう。

直隸總督、曾國藩が、両江總督への転任を命ずる上諭を受け取ったのは八月三〇日の午前である。最初は心臓病の持病と右目失明、左目網膜剥離を理由に固辞したが、「貴殿がそこに鎮座してこそ、諸事万端理にかなった運営ができる」¹⁰という宮廷の異例の強い要請を前に、江寧への赴任を受け入れる。一〇月二二日の天津教案の結審を見届け、北京にて皇太后（西太后）、皇上（同治帝）との謁見を済ませた後、十一月七日、北京を出発、十二月一四日、江寧

にて公務を開始した。一方、刑部尚書の鄭敦謹が欽差大臣を拝命したのは、一八七一年一月七日のことであった。鄭敦謹は直ちに行途に着き、大雪の中を徒歩で南を目指した。二月一八日に江寧着。

二月二〇日より、張汶詳事件の合同審査が始まった。鄭敦謹が委嘱した会審委員は刑部滿郎中の伊勒通阿、同漢郎中の顏士璋、曾國藩の側は江安糧道の王大經、江蘇題補道の洪汝奎、それに、魁玉による捜査以来の委員である江蘇候補道の孫衣言、山東候補道の袁保慶であった。

今回の合同審査はわずか二週間足らずのスピード審議であった。驚くべきことに、三月一九日に提出された事件の判決書は、張汶詳の背後に首謀者がいなかったという最終結論を変えなかった。¹¹

事件を最初に処理した魁玉は、首謀者の存在を確信していた。張之万の第二調書もまた失敗に終わったとはいえ、首謀者を追跡することを諦めていない。この第二調書が最終判決書とならなかったのは、曾國藩と鄭敦謹の捜査が、背後の首謀者を逮捕することに、北京の宮廷が一縷の望みを託したからである。

最終調書はその作成に携わった合同審査委員の全員一致で成立したものでもなかった。委員の一人、山東候補道の袁保慶（袁世凱の義父）は、極悪事件尋問のプロであった。彼は、張汶詳の口から事件の全貌を語らせるには、拷問を加える他はないことを強く主張した。また、江蘇候補道の孫衣言（孫詒讓の実父）は、馬新貽が最も信頼を寄せた部下の一人だが、巷間に馬新貽の過去に対する好奇に満ちた噂が絶えないのは、取りも直さず尋問の不徹底によって事件の真実が歪められたままであるからだと言った。馬新貽総督の名誉を守るためにも、嚴罰は必至であるという理由から、孫もまた張汶詳を拷問に掛けることを主張したのである。二人は、微温的な調書の内容を不服として、その署名を拒んだ。

判決書取りまとめの最終責任者である鄭敦謹は、結審後、江寧を離れる直前に、突如、刑部尚書を辞任することを、曾国藩ら江寧の幹部の前に明かした。彼は江寧を離れた後、清江浦まで来たところで、北京には戻らないと宣言し、故郷の長沙（湖南）に引き籠り、二度と官職に復帰することはない。そして、この忌まわしい事件に対するあらゆるコメントを頑なに拒み、氷のような沈黙を守ったまま、十五年後にその生を終えた。¹²

三月二十六日、この判決書を承認する諭旨が下達された。これまで報告書が事件の首謀者を突き止めていないことを非難してきた宮廷は、今度はそうした非難をおくびにも出さなかった。代わって、馬新貽総督の護衛にあたった十一人の内、喻吉三、葉化龍の二人が二級降格、唐得金が革職の処罰を受けた。¹³四月四日、曾国藩は判決に基づき、江寧にて張汶詳を凌遲刑に処し、その心臓を馬新貽の位牌に捧げ、改めて総督の忠勤篤業の功績を讃えた。

振り返れば、鄭敦謹、孫衣言、袁保慶の最終判決書への無言の抗議は、全て曾国藩に向けられたものであった。この三人が曾国藩とは敵対する政治派閥に属していたのならまだしも、孫衣言、袁保慶に至っては曾国藩の幕僚である。鄭敦謹もまた、この時代、音に聞こえた硬骨漢であり、その議論を当時の人士は襟を正して聞いた。

彼らは、判決書に疑問符を呈することで、事件は張汶詳の単独犯行ではなく、その背後に首謀者がいることを、改めて人々に強く意識させた。逆に、曾国藩は、そして宮廷は、首謀者がいないという判決を支持することで、その議論に終止符を打とうとした。ここから、事件の首謀者は、曾国藩の派閥、すなわち湘軍関係者だという悪意ある憶測が生まれた。けれども、繰り返せば、判決書を拒否した三人のうち二人は、曾国藩の幕僚として、湘軍とは密接な利害関係にあった。仮に、事件が本当に湘軍の手引きでなされたなら、少なくとも、孫衣言と袁保慶は、師の曾国藩を守るために、公開の場での判決書批判は避けたに違いない。ところが、実際はと言えば、この二人は、判決書の署名

を拒否することを通じて、首謀者が別に存在することを、世論に向かってこの上もなく強く訴えたのである。以上の経緯から得られる結論は一つしかない。張汶詳の事件の真犯人は、確かに曾国藩が庇護せねばならない人物あるいは派閥ではあった。しかし、湘軍の関係者ではなかったのである。

二 曾国藩と馬新貽

この度の暗殺事件の遠因は、一八六八年八月二二日（同治七年七月初五日）に勃発した揚州教案にある。揚州では一八六六年からフランス宣教師の伝道が始まり、六七年にドラマール（Delamare）が孤児院を設立した。六八年にはイギリス内地会の宣教師ハドソン・テイラー（James Hudson Taylor）が、常鎮道の紹介で揚州知府の認可を得ないまま揚州の不動産物件を購入し、そこに内地会（the China Inland Mission）を設立した。この年、ドラマールの孤児院で四十人の孤児の虐待死と疑われる事例が発生すると、洋人が子供から脳髓と眼球を取り出しているというデマが拡がり、八月一八日、府学の試験に集まった受験生がドラマールの住宅を襲った。二二日に、揚州で教会孤児院の幼児と見られる二人の死体が見つかり、江都県でも十二人の幼児殺害が報告された。怒りに駆られた数百人の民衆が教会を襲い、ドラマールが揚州不在と知るや、ハドソン・テイラーの住宅に放火し、室内の物品を略奪するに及んだ。¹⁴

この事件の調査責任者は両江総督の曾国藩であったが、浙江巡撫の馬新貽も事態解決に向けて尽力した。曾国藩は一八六五年締結のベルテミー（Joule Berthemy）協定に照らして、テイラーが教会の敷地用として、揚州の土地所

有者から賃貸した不動産契約が無効であることを主張し、キリスト教会の布教活動そのものを中国地方政府の管理下に置こうとした。しかし、駐華イギリス公使のオールコック (Sir Rutherford Alcock) と駐上海領事のメドハースト (Sir Walter Henry Medhurst) が、賠償金請求のためにイギリス艦隊を長江に派遣すると曾国藩を恫喝した。それまでの教案事件にはなかった新たな展開は、六七年から始まっていた北京条約の改訂協議と相俟って、長江流域の防衛議論を嫌が上にも高めた。

曾国藩と馬新貽の関係を考える上で、この事件は決定的な意味を持つ。揚州教案の紛争処理に忙殺されていた矢先の九月六日、宮廷が意表を付く人事異動を通達したからである。曾国藩を直隸総督に、馬新貽を両江総督に、英桂を閩浙総督にそれぞれ任命するというトリプル人事が、それである。¹⁵

馬新貽が曾国藩を衙門に尋ねたのは十一月四日であった。両江総督の公務の引き継ぎが話題であった。翌日には、曾国藩が馬新貽を訪ねた。十二月二日、曾国藩と馬新貽の幕府の構成員が一堂に会した。一日、二人の詰めの話し合いには、呉大廷と李鴻章が立ち会った。一七日、曾国藩の旅立ちを馬新貽は見送る。二人にとっては生前最後の交流となった。¹⁶

曾国藩が京師に到着したのは一八六九年一月二五日のことである。金魚胡同の賢良寺に帰宿した。¹⁷ この日から三月二日まで、一か月を越える京師での精力的な情報収集が始まる。

二月一日には、賢良寺から紫禁城に近い法源寺に居を移した。一五日、曾国藩は八時一五分、倭仁の住居を訪れ、この日、重要な部院大臣の合同会議が開かれることを知った。曾国藩も議論に参加することを求められた。二人は長安門外まで駕籠に乗り、そこから一緒に内閣の会議室まで歩いた。「醇郡王奕譞が奏摺を提出し、洋人を駆逐する法

を論じたい。醇郡王と大学士が合同で協議の上、この文書を上奏し、本日中に内閣でも議論することになるだろう。醇郡王と朱鳳標はすでに到着して、瑞常が後から来た。¹⁸」

部院大臣合同会議が始まった。口火を切ったのは醇郡王奕譞であつた。彼はすでに提出済みの奏摺の内容を詳説した。醇郡王の奏摺の骨子は六条から成る。

(1)馬穀山（新貽）の密摺における「平和条約が結ばれ何事もなければ、大局を維持する責任は王と大臣にあり、平和条約が決裂すれば、大局を維持するのは督撫に掛っている」という件につき、謹んでお尋ねしたい。当該の督撫は確かにこのことを把握されているのか。合わせ、夷狄を制圧する法を各自準備されんことを求めたい。

(2)王、大臣におかれては各自の考えを披瀝し、目下の難局を救済されたい。

(3)督撫には、紳士と民衆に向け、教会を破壊するよう督励することを求める。

(4)宮中にある西洋の物品を褒賞に出すか、あるいは廃棄されたい。

(5)経験ある老将を謁見して外夷を防御されたい。

(6)京師に出入りする洋人の人口統計を取ることを求める。¹⁹

会議は騒然となった。第三条の文言については、特に議論が紛糾した。奕譞の奏摺の原文はこうなっている。「天下全体について論ずれば、キリスト教入信者は一割にも満たない。それ以外は悲憤慷慨の人士、臥薪嘗胆の民衆であつて、夷を滅ばさんと決意する者たちで、アヘン戦争時の広東潮州を見れば、その凡そを類推できるだろう。軍務

がやや平穏なときこそ、総督巡撫が率先して、郷紳を激励し、民衆を督励し、賢者には皇帝の恩恵を示し、愚者には財貨をもつて動かし、かの教会を焼き払い、かの西洋の物資を差し止め、かの洋商を殺害し、かの貨物船を沈没させるべきであろう。²⁰」ここには、国家権力によるテロリズムの勧めとでも言うべき内容が示されている。国家の意思において、暴動や殺害を含めたあらゆる手段を駆使して、西洋に関係する人、モノ、金の流れを遮断する運動に人々を動員しようとしている。

このような文書を国家の公式文書として採択することは適切な処置だろうか。合同会議の意見は分かれた。曾國藩は倭仁が中心になってこの文書を修正すべきことを提案した。醇郡王自身と三大臣（その名前は記されていない）が修正の取りまとめは曾國藩が担ってはどうかと主張した。正午から始まって午後四時三〇分まで修正作業は続けられた。こうして、奕譞の長大な奏摺は、ほぼ半分になり、決定稿が成った。修正の跡は、特に第三条に著しい。

洋人が内地に入ってから以後、甚大な被害をもたらしてきたのは伝道の一事である。至るところで、孤兒院に名を借り、幼兒を收容して、民間には、彼らが眼球を取り、心臓を裂き、脳髓を切り開くなどの伝承が流れたため、民衆の恨みは骨髓に徹し、衆が集まって教会を燃やし、宣教師を傷付けている。しかしながら、教案が激発された後は、当の洋酋が決まって大きな騷擾を引き起こし、銀両を搾取して教会の修理に当て、教案を先導した紳士民衆を懲罰し、苛斂誅求して飽くことを知らない。昨年、揚州で教会が破壊された折り、洋酋は直ちに艦隊を率いて金陵に現れ、脅迫を縦にした。台湾の宣教師毆打事件でも、洋酋はやはり艦隊を派遣して立て続けに勝利を収めた上に、賠償金まで要求する始末であった。民間で教会破壊事件の起こった際、地方官僚が民間を庇護することが全くなければ、不良分

子たちの中には信教に利益を見出す者がもつと増加するだろうし、努めて民間の側を庇護したならば、今度は無頼たちが教会を破壊し、器物を略奪する計画を立てて、不測の事態を招来する恐れが生まれ、その結果、戦争の準備はするが先制攻撃はしないという原則に違反してしまう。議論を繰り返しても良策はないから、総理衙門に以下のことを洋酋と協議するよう命じるべきである。伝道の場所には孤児院を設置することを禁じ、紛争を惹起する懸念を払拭したいと。各省の総督巡撫におかれては、教会のある州県に対して、軍事訓練と軍備整頓につき議論している間は、奸民に紛争の発端を開くようなことを許してはならず、今後、それらを整え次第、良民を激励して、将来の計画を立てるよう、現地の紳士民衆に告示する内容の密諭を發せよ。²¹

曾國藩と部院大臣の努力で、大清は、國家の軍事と宗教政策を巡って最低限の品位と節度ある安全保障政策を国内外に宣言することができた。

しかし、決定稿の第一条の冒頭に、馬新貽の發言が高々と掲げられたのは、醇郡王の原稿通りであった。馬新貽が大清の國家政策を主導する地位にあることを、この奏摺は明らかにした。圧倒的な威信を持つて君臨してきた曾國藩に代わる新しい地方政治家の誕生であった。曾國藩が、馬新貽を前途有為な政治家としてではなく、自己の權威に挑戦する強力なライバルと意識したのは、おそらくこの日である。

この合同會議の記録とそれに対する所見は、別の政治家も記録している。侍講學士として同治帝の教育係を勤めた翁同龢の日記が、それである。「原摺は六条だが、うち、西洋の物資を排除せよ、京師に出入りする洋人の嚴密な人口統計を取るべしという二条は、まことに時宜に叶っていた。六部九卿は、これに対する所見を披瀝し、民衆が洋人

の物資を焼却することを密かに命じた。²²」醇郡王奕譞の国家テロリズムの主張の一部は、決定稿からは削られたが、西洋物資の超法規的な焼却は密諭の形で地方に伝達されたことが分かる。のみならず、帝師の翁同龢はそれを支持する口吻であつた。醇郡王の宮廷における勢力は端倪すべからざるものがあつた。

醇郡王奕譞は道光帝の第七子。咸豐帝（四兄）と恭親王奕訢（六兄）の弟、慈禧太后（西太后）の妹夫。光緒帝の実父、ラストエンペラー溥儀の祖父でもあつた。父の道光帝がアヘン戦争に敗北し、南京条約を締結した際、その雪辱と復讐を固く誓つた。咸豐十（一八六〇）年、第二次アヘン戦争に当たり、英仏連合軍の北京侵攻を前に蒙塵する実兄の咸豐帝に対して首都決戦を涙ながらに主張した。翌十一（一八六一）年、咸豐帝死去後に、西太后、恭親王奕訢、勝保と計つて宮廷クーデターを敢行、肅順王を筆頭とする八大臣を肅清し、同治の新政、西太后垂簾政治に道を開いた。しかし、クーデターの論功行賞では、恭親王に議政王、首席軍機大臣、宗人府宗令、總理衙門首席大臣を攫われ、自身は御前大臣、侍衛内大臣、管理神機營のポストを得るに留まつた。同治四（一八六五）年、自己の派閥の領袖、蔡寿祺と図り、西太后の暗黙の許可の下、恭親王奕訢を議政王から追放した。²³西太后は頑迷な保守主義からはほど遠い政治家だが、政敵排除において、この甥のエスノセントリズムとショービズムを存分に利用した。

三 天津教案

馬新貽暗殺事件が起こつた一八七〇年八月二二日、直隸総督の曾國藩は、六月二一日に勃発した天津教案の解決に忙殺されていた。七月一〇日、保定から天津に移つた曾國藩は、三口通商大臣の崇厚と捜査の態勢を整え、一四日

には天津知府の張光藻と天津知県の劉傑を職務より解任して事情聴取を始める一方、一七日、フランス公使のロッシュュアル (Louis Jules Emilien de Rochehouart) との協議に臨んだ。破壊された教会の修理、フォンタニエ (Henri Victor Fontanier) 領事の埋葬、地方官憲の処罰、殺害犯の捜索を骨子とする協定案の合意が大詰めを迎えた矢先の一九日、ロッシュュアルの態度が豹変した。彼は、天津知府の張光藻、天津知県の劉傑、提督の陳国瑞の三人を事件の主犯であると断定し、天津において三人の死刑を求める内容の照会文書を発した。曾國藩は、すでに解任した張光藻と劉傑を謹慎先の順徳 (河北) と密雲 (直隸) から再召喚することを命じ、京師に戻った陳国瑞については、所属の神機營 (近衛兵) を管轄する醇郡王奕譞に向け、陳国瑞の事情聴取への協力を依頼した。²⁴

宮廷が神機營に陳国瑞の天津護送を命じたのは二七日であつた。しかし、神機營の責任者である奕譞はこの要求を拒絶した。陳国瑞がセングリンチン將軍の下で成し遂げた戦績は目覚ましく、今後の「禦夷之用」になくてはならない人材である。奕譞はすでに今回の件について、本人から詳しく事情聴取した、と述べた。陳国瑞は事件当日、たまたま天津に滞在した。しかし廟寓からは出ず、救援を求める人々には、自分は「行路の人」であるから、関与はできないと述べた。崇厚が撃たれたという噂を聞き、通商衙門 (フランス領事館) に向かったが、デマと分かった後は、崇厚と言葉を交わして別れた。民衆が外国人を殺害した件は目撃していない。奕譞は、この陳国瑞の供述を根拠に、今回の告発は、フランス側が安易にデマを信じたことから起こったと述べ、真犯人がなかなか見付からず、外国の非難を受けたからと言って、無辜の人々を拘束して、これまでの名声を傷つけないよう、曾國藩に求めた。同日に提出した密摺では、フランスの方こそ、広東の匪徒四千人を雇用して報復を企図しているという噂があると述べて、両広総督の瑞麟と広東巡撫の李福泰に注意を喚起した。²⁵

しかし、フランスの対応は強硬であった。七月二十六日、フランス海軍提督のデュプレー (Duparey) は、二七日午前四時までに誠実な回答が得られねば軍艦を率いて京師に赴き、その後で軍艦と共に天津に戻って、ロッシユアル公使を乗せた上で上海に向かう、という最後通牒を崇厚に発した。報告を聞いた曾國藩は、その場に倒れた。宿病の心筋梗塞の発作であった。激しい嘔吐と共に昏倒した彼が蘇生したのは三時間後である。²⁶

宮廷は、曾國藩の健康状態への配慮から、彼の周囲に強力な助手を置くことにした。七月二十八日、工部尚書の毛昶熙と江蘇巡撫の丁日昌の天津派遣を求め、李鴻章に配下の郭松林らの部隊を率いて畿内に進駐することを命ずる上諭が発せられた。外国宣教師殺害と教会破壊の真相究明に教案問題に精通した辣腕官僚を充て、白河を経由して北京に軍事威嚇を加えようとする外国海軍の動きを封ずるため淮軍を京師へと急行させたのである。上諭はさらに、丁日昌の後任に張兆棟を充てること、ロッシユアルがフランス艦隊と共に上海に現れるという不測の事態に備え、張兆棟は、両江総督の馬新貽と協力して長江の防衛態勢を早急に構築することを求めた。²⁷しかし、八月二十九日に発表された曾國藩を両江総督に、李鴻章を直隸総督に任命する人事は、曾國藩の天津教案解決に向けた二か月にわたる努力に、宮廷が大きな不満を持っていたことをも端なくも示した。教会が経営する孤兒院で、子供の心臓や目玉がくり抜かれたという噂を発した暴動事件を解決する上で、曾國藩の努力はそうした噂が単なるデマに過ぎないことを証明することに当てられたが、宮廷にとって、そんなものは瑣末な問題に過ぎなかった。それに拘泥して時間を空費する曾國藩に朝廷は苛立っていた。

八月二〇日、丁日昌は昼夜兼行で蘇州から天津に駆け付けた。²⁸丁は曾國藩が最も信頼を寄せた幕僚の一人である。しかし、江蘇巡撫として馬新貽の密接なパートナーでもあった丁は、張汶詳による馬暗殺を使囑した事件の「主犯」

として、一八七一年一月三〇日に、太常寺少卿の王家璧に告発されることになる。²⁰ 丁の一族が関係した殺人事件を馬新貽が裁くに当たって、その一族に不利な判決を下したことに私怨を抱いた丁日昌が、張汶詳による馬の殺害を影で幫助したというのである。

丁日昌を襲ったスキャンダルとは、こういうものである。一八六九年一〇月、太湖水師の哨勇である除有得、劉歩標の二人が蘇州の遊郭を訪れた。そして、先客であった丁日昌の一族で都司の丁炳や范貴たちとの間で、指名女性の取り合いを始めた。その夜は、蘇州親兵營の薛蔭榜が巡回の当番であった。薛は、揉め事を起こした双方に四十回の毆打刑を課した。除有得がその処置に不服を唱えたため、再び毆打され、四日後、死亡した。江蘇巡撫の丁日昌は、親族の丁炳と范貴を降格処分とした上で、それ以外の事件関係者を馬新貽の裁判に委ねた。だが、その直後に、甥の丁繼祖と、知府であった息子の丁惠衡も現場で暴力を振るったことが明るみに出ると、丁はこの二人の職務も解いた。馬新貽が裁判長を勤める法廷には、江寧布政使の梅啓照と江蘇按察使の応宝時が参加した。丁繼祖は出廷に応じた。しかし、丁日昌の息子、丁惠衡は逃走した。丁惠衡の不在は裁判の進行に支障をもたらした。この裁判が結審したのは一八七〇年七月、馬新貽暗殺のわずか一か月前だった。薛蔭榜、丁惠衡、丁繼祖、丁炳は正式に職務を解かれた。馬新貽は、未審議の丁惠衡の案件を朝廷の決済に委ねた。³⁰

馬新貽は逃走中の丁惠衡をそれ以上追及しなかった。父親の丁日昌に対する遠慮からであった。この裁判を機縁に丁と馬の間に私怨が生まれたとする王家璧の告発は、したがって的外れである。けれども、この事件は、太湖水師の哨勇を蘇州親兵營の責任者が毆打殺害に至らしめたという別の側面を持つ。太湖水師は湘軍の管轄下にある。一方、蘇州親兵營は両江総督の馬新貽が指揮権を有していた。太湖水師の一軍人の死亡が他殺だったか否かは、裁判で全く

問題にならなかった。薛蔭榜の革職という判決は確かに寛容に過ぎた。馬新貽は自分の配下の軍人を庇ったことで、間接的に湘軍の不可侵の聖域を傷付けたかもしれないのである。

馬新貽が生前最後に起草した奏摺は「密陳蘇省水陸籌備大致情形摺」であつた。³¹ 江蘇省の水師と督標（直轄軍）の整備計画を述べたものだ。日付は「同治九年七月二十五日」とある。新暦にして一八七〇年八月二日、丁日昌が蘇州から天津に赴任し、曾國藩と天津教案の解決策を協議したまさにその日である。

馬新貽の水師・督標整備計画は、フランス公使のロッシュアルがフランス艦隊を率いて上海に現れるという非常事態を想定した上で、その準備のための方策を提言した。丁日昌が天津に着いたその日の曾國藩日記に「馬穀山（新貽）への書簡に三百字余りを追加³²」とあるのは、「密陳蘇省水陸籌備大致情形摺」に対する國藩の意見表明であつたと見てほぼ間違いない。湘軍を母体とする長江水師が上海沖で列強海軍と戦闘を交える非常事態をいかに回避するかという問題意識を、國藩は馬新貽と共有しようとしたに違いない。

馬の奏摺が提出され、丁日昌が天津に着いた翌日の八月二二日は、馬新貽が張汶詳の凶器に斃れた日だつた。しかし、江蘇省の長江下流域において水師と督標の防備態勢を整えよという馬新貽の遺言は、丁日昌や曾國藩の努力によつて着実に実行に移されていった。

八月二六日、フランス公使のロッシュアルが、陳國瑞を拘束することを総理衙門の突訴に再度求める強硬な照会文書を發した。³³

八月二七日、曾國藩は、総理衙門からの書簡を受け取つた。「これを閲すること、まことに久し³⁴。」馬新貽の暗殺を伝える宮廷の第一報であつた。

九月七日、恭親王奕訢は京師のフランス公使館に自ら赴き、陳国瑞は無実であり、天津に送ることはできないと説いたが、ロッシュュアルは陳国瑞の犯罪には確証があると反論し、彼の送還を強く求めたことを翁同龢日記が記す。³⁵

九月一四日、神機營王大臣に向けて、提督の陳国瑞を天津に派遣し、教案の捜査に協力させるよう求める上諭が発せられた。³⁶

曾國藩が天津教案に関連して逮捕した三十六人の容疑者に判決を下したのは九月二〇日であった。³⁷ 天津教案の重要参考人、神機營提督の陳国瑞もまたこの日、天津に到着した。

九月二三日、陳国瑞の供述書が提出された。文面は以下のごとくである。

謹んで調査しましたところ、国瑞は六月六日、書記一名、馬夫二名に、使用人二名を連れて、山東の德州から船に乗って北上しました。一五日、天津に到着し、白河の北にある北極寺に投宿しました。風邪と悪寒に苦しむこと数日、当該寺院の僧である雲顛が駱医師に診察を依頼し、飲み薬と貼り薬の処方を受けました。三口通商大臣の崇厚が国瑞の住まいを一度訪れました。次いで、武挙進士の修樹棠が二度面会を求め、国瑞に部隊を率いて天津市内に来るよう求めましたが、その場で拒絶しました。二一日、病で伏せているとき、突然、銅鑼が鳴り出し、付き添いの使用人に何があったと聞きましたが、分からないと言います。すぐに僧から、外国人が通商大臣を傷付けたことを聞き出しましたので、国瑞は使用人に馬を準備させ、公使館街に急ぎました。公使館の入り口で崇厚大臣と会い、駐天津領事のフォンタニエが崇厚大臣に向かって正面から二度発砲したが、幸いに弾が逸れたことを聞きました。しばらくすると、この領事が天津の劉県令を狙撃し、弾がその使用人に当たったことを知りました。劉県令は公使館街まで逃

れ、崇厚大臣に軍隊を派遣し鎮圧するよう求めた際、その話の中でフォンタニエ領事が民衆に撃たれ、天主堂（望海楼教堂）に火が放たれたことに言及したそうです。国瑞は崇厚大臣が事態を制御できず混乱を防げないことを確認して、宿に戻って再び床に入りました。二六日、船を買って京師に入りました。お尋ねの主犯、周起龍ですが、幸い面識はありませんし、その行方も存じません。捜査に当たって供述した内容に偽りはありません。³⁸

九月二九日、供述を済ませた陳国瑞は京師の神機營に帰還した。天津知府と同知県は罪に問われたが、陳国瑞はついに無罪であった。

しかし、陳国瑞の犯罪行為は、外国宣教師や外交官の報告の中では再三にわたって告発されている。特に、ウェード (Thomas Francis Wade) がグランヴィル伯爵 (Earl Granville) に宛てた書簡（一〇月一二日）は、陳国瑞の行動の本質を言い当てる、余すところがない。その報告は、今回の動乱を「正真正銘の土匪、ギャングの仕業」と言い、「天津におけるアルザス式のフリーメーソン」である彼ら混星子を扇動した張本人が陳国瑞だと暴露したのである。³⁹

ウェード（ウェード式中国語表記を考案した、あのウェードである）の分析は、陳国瑞が天津の秘密結社である「混星子」と結託して、天津のキリスト教徒を殲滅するために入念に計画した犯罪行為であったと断定した。陳は、醇郡王奕譞が一八六九年一月に公表した国家テロリズムの確信的な実行者であった。事実、彼は奕譞にその類稀なる謀略の才能を高く買われ、奕譞が責任者を勤める神機營の提督となった。彼の無罪放免は庇護者である奕譞の力に依るところが大きい。

「混星子」とは、雑ぜ返し屋のこと。至るところで物事を妨害する連中を指す。天津の秘密結社の異名であった。

張燾の『津門雜記』に良い説明がある。「天津には土匪、ギャングが多く、全国の省の中でも指折りである。町全体が無頼遊民に溢れ、同じ釜の飯を食い、鍋仲間と称し、混混と自称する。又の名が混星子である。死を恐れぬ集まりで、市場を牛耳り、商民に危害を加え、徒党を組んで、些細なことから騒ぎを起こす。天津の喧嘩は群架を打つといい、類は友を呼び、緊密に助け合い、人々も進んでその労に報い、目出度くヤクザになれたと寿ぐのである。」⁴⁰今回の暴動を指揮した天津の消防組合は「水会」とも、「火会」とも、「火水会」とも呼ばれたが、単なる民間の消防組合ではなく、混星子を成員とする秘密結社であった。⁴¹

醇郡王奕譞の庇護を背景に、陳国瑞の指揮の下で、混星子たちは天津に居住する洋人を殺害し、その物資を略奪することに成功した。曾國藩は、こうした国家テロリズムを前に為す術がなかった。けれども、彼は陳国瑞たちの暴動が秘密結社の発動したものであることを七月二一日の時点で、はっきりと公言している。これはロッシユアルの告発を大筋において認めたことを意味する。

天津の風紀は乱暴なもので、義を好む者が多い。付和雷同する人々も、義憤に駆られることは人後に落ちず、問答無用の攻撃をする。かかる凶悪犯およびその便乗者たちは、逮捕厳罰して、将来の戒めとすべきである。中国国内においてさえ、官を傷つけ命を殺めた者は、刑法の条文に照らして処罰される。まして、多くの外国人に傷害を加え、動乱の一手手前まで及んだ以上、その凶悪な風を助長させてはならない。もつとも、この度は主唱者が事前に準備したのではなく、真犯人にも首謀者はいない。天津府の人心はいまだに不穏なままで、混星子と呼ばれる者たちが党を結び、群れを成して、乱を好み、災いを楽しんでいる。兵力に頼って初めて鎮圧が可能になると言うべきだ。近頃、

保定に駐屯する劉銘伝の銘軍三千人を静海に異動させたが、この軍隊は記名布政使の丁寿昌に率いられ、しかも彼は、今は天津道員の候補であるから、民衆の気風が落ち着けば、天津教案の犯人逮捕を彼に任せたいと思う。当該の候補道員が天津の知府や知県と一緒に事に当たれば、大きな効果を挙げられよう。主犯、武珍蘭はその供述で教会の破壊に言及しているから、臣崇厚に命じて地方官を教会に派遣して調査させれば、数々の疑念を晴らすことができる。⁴²

曾國藩はこの教案が単純な民衆暴動ではなく、その背後に混星子の策謀があつたと明言している。しかし、彼のこの奏摺は同時に鋭い矛盾を抱えたものである。それは、この事件が陰謀ではないこと、首謀者が別に存在するのではなく、混星子の自然発生的な動乱であることを強調する点に示されている。外国勢力が、長江下流域に海軍を結集させることを恐れた國藩の過剰な自己防御の表れであり、歴史の真実に対する冒瀆であつた。イギリスのウェードと同じ前提から出発しながら、彼はこの教案を国家テロリズムと断定することは避けたのである。これに続いて彼が処理することになる馬新貽刺殺においても、國藩は張汶詳の背後の「首謀者」の存在を知らながら、それを明るみに出すことを拒否した。ここで再び、張汶詳事件に戻ることにしよう。

四 張汶詳とは誰か？

鄭敦謹と曾國藩による最終調書（一八七〇年三月一九日）中の張汶詳の記載は、それまでの内容を修正することなく細部をより詳しく描いたものである。⁴³ 四つに分けて説明したい。

(1)張汶詳は道光二十九（一八四九）年に河南汝陽に代々引き継がれた家屋を売却し、氈帽の独占販売権を買い取り、寧波にて氈帽売りの商売を始めた。そこで、軍法を犯し寧波に追放された羅法善を知り、河南の同郷という諄みで交流を深めた。短期利回りの高利貸し（印子銭）を営むようになった張汶詳は羅の娘を娶り、一男二女に恵まれた。事件発生当時、長女（宝珍）、次女（秀珍）、長男（長幅）は、それぞれ満で一七歳、一四歳、一二歳だから、逆算して長女が生まれたのは咸豊四（一八五四）年である。二人の結婚は咸豊二（一八五二）年から三（一八五三）年にかけてであろう。一八四九年から五二年まで彼が寧波にいたかどうかは不明である。

張汶詳が寧波で始めた商売は氈帽売りであった。氈帽は縁なしのフェルト帽で、当時の庶民が愛用したもののだが、官軍の徽章でもある。万暦十四（一五八六）年に、ヌルハチが明朝に通じたニカン・ワイラン（厄堪外蘭）を打倒する際に目印としたのはワイランが被った明朝官人の氈帽であった。⁴⁴ 乾隆十二（一七四七）年には、直隸と山東を連絡する宮廷専用の漕運船において、人夫が身に付けるべき一つとして氈帽が指定された。⁴⁵ 氈帽の販売独占権が河南汝陽の不動産価格に匹敵したのは、これら官軍を相手に大きな利益が得られたからである。氈帽の販売人は、各地の戦場や運河埠頭への自由な出入りを許されていた。彼らはただの帽子屋ではないのだ。戦場での武器や密輸物資の闇取引に関わるブローカーと言って良い。したがって、軍法を犯して寧波に追放された羅法善と張汶詳が結託したのには然るべき理由があった。

ところで、張汶詳の商売は、羅法善との交流後に、突如、氈帽の販売人から、短期利回りの高利貸し屋に変わったとある。印子銭とは、日割りか、月割りのごく短期間に高利の金を貸す金融業を指す。通帳に返却の度に印を押す約束になっている。印を押せない借り手は、脅迫、拘禁、場合によっては殺害といったあらゆる手段で金を取り立てら

れる。その汚れ役を買って出たのは遊民や無頼だった。張汶詳の金融業は、彼らの暴力行為なしには成立し得ない。

張汶詳のいた寧波近辺には天地会の辺錢会や金錢会の存在が確認される。⁴⁶ 後で張汶詳が参加することになる侍王李世賢の軍団は、金錢会との連合戦線を組んだ。張汶詳の印子錢という金融業は、金錢会に代表される塩梟や秘密結社の暴力行為に支えられていた。

咸豐二年か三年に結婚した張汶詳は「寧波」に定着したように見える。しかし、彼は怪しげな帽子屋であり、阿漕な金貸業者である。寧波にいる時間よりは、外回りの方が遙かに多かったはずである。

(2) 咸豐十一（一八六一）年十一月（新暦では十二月）、太平天国の侍王李世賢が率いる軍団が寧波を陥落させた。張汶詳は銀貨と洋幣を隠匿し、子供たちを城外に避難させた。旧知の陳世澂が、李世賢軍の後衛護軍にいた。陳世澂は密かに部下の王樹勛を派遣し、張汶詳の印子錢の店に太平天国の旗を掲げ、太平天国を支持する声明文を店頭に貼らせたので、張は難を免れた。それから陳世澂は張汶詳を連れて寧波を脱出した。張は陳と共に、諸暨県の包圍攻撃に参加した。しかし、陳はこの戦場で諸暨県の団練の反撃を受け、戦死する。

一人遭された張汶詳は李世賢軍の後衛護軍に属し、「安徽、江西、広東、福建など」を転戦した。同治三（一八六四）年九月（新暦では一〇月）前後、李世賢と汪海容の連合軍が福建の漳州を陥落させた際、同郷の時金彪が捕虜となった。張汶詳は旧知の彼を秘密の場所に避難させた。太平天国に希望を託せなかったので、時金彪と示し合わせて船で逃亡し、この年の十二月（新暦では一八六五年一月）、剃髪の上、提督の黄少春の軍営に投降した。太平天国の極秘情報を黄提督に伝えようとしたが、提督は警戒を隠さなかった。ここも安全ではないと考えた張汶詳は金を工面して軍籍を外れ、時金彪と共に廈門に逃げた。時金彪はまもなく福州へと去った。

この供述部分も、具体的な日時が記されるかと思うと、極めて漠然とした仕方です。それが暗示されるといった具合で、張汶詳はまるで霧の中を歩いているかのようだ。もともと、霧の中にぼつんと浮かび上がる灯台のように、供述書に記載された具体的年月は、それだけ取って見れば、一つとして正確でないものはない。

まず、李世賢の寧波陷落は確かに一八六一年二月九日（旧暦の十一月）である⁴⁷。しかし供述書には書かれていないことがある。寧波を落とした後、李世賢は自分の軍団を二つに分け、自らは福建へと南進した。だが、張汶詳は別の部隊と共に北上したのだ。寧波陷落の後、張汶詳が浙江の諸暨県にいたのは、そのためである。のみならず、諸暨県での戦闘は、寧波攻略から実に半年後の一八六二年五月二十四日であった。張汶詳はこのとき、李世賢の部下である梯王練業坤と来王陸德順が率いる軍団の戦闘員であった。彼らを打ち破ったのは諸暨県の団練、包立身である。

張汶詳の従軍体験は「安徽、江西、広東、福建など」と、ほんの数語で片付けられている。しかし、李世賢の寧波攻略に並行して、安徽では捻軍の苗沛霖が太平天国に反旗を翻し、欽差大臣勝保へと投降する大事件があった。苗の投降を知らなかった太平天国の英王陳玉成は、苗の姦計に陥り、一八六二年六月四日に殺害された。李世賢の軍団が安徽に転戦するのは、陳玉成を失ったことによる劣勢を逆転することを期待されたからである。しかし、李世賢は安徽に赴く前に、なお天京防衛、蘇州攻撃という重要戦役に忠王李秀成と共に参加している。

李世賢の安徽入りは一八六四年二月一日、最南端の徽州績溪からであった。四月二二日、総兵唐義訓を徽州楊村で大敗させた後、四月二九日、江西の玉山に入り、五月二三日と二四日に、撫州と建昌を攻めるが、道員席宝田に阻まれ、その快進撃は止まる。五月三十一日、崇仁を陥落させると、彼は城内に立て籠もるという致命的な戦略ミスを犯すに至る。

一八六四年は太平天国滅亡の年として記憶される。六月一日、洪秀全がアヘン中毒により死亡。七月一九日、天京陥落。八月七日、忠王李秀成刑死。この日、江西の崇仁にて、李世賢は席宝田の軍を退けた。しかし、八月二二日、崇仁が陥落した。李世賢は江西の東南へと逃走を始め、九月三〇日、江西の安遠、長寧から広東の平遠に入った。

一〇月四日、曾國荃が病氣療養を理由に浙江巡撫を辞任、馬新貽がその後任に就いた。

一〇月一四日、李世賢の軍団が広東を縦断し、福建の漳州に入った。張汝詳の旧友、時金彪が太平天国軍の捕虜になったのは、この日であった。

以上の整理から、次のことが分かる。供述書は張汝詳の従軍記録を「安徽、江西、広東、福建など」とまとめたが、諸暨での戦闘（一八六二年五月二四日）から李世賢軍団の一員としての安徽進軍（一九六四年二月一三日）までの、およそ二年間の従軍記録を欠いている。彼はこの間、どこで、何をしていたのか。彼はすでに寧波の印子銭の店から逃亡している。李世賢が部隊を二つに分けて福建に進軍したときも、寧波から北にある諸暨にいた。彼は浙江を離れていなかった。

この未曾有の動乱期に、同郷の陳世澹や時金彪が彼の前に突然現れ、窮地にある張を救出したり、逆に張の方が旧友の逃亡を助けるという叙述も、唐突の感を免れない。時金彪は馬新貽刺殺事件の当時、山西で従軍していた。事件発生から二か月後に、彼が事件の重要参考人として江寧に出頭せよという令状を受け取ったことは既に見た。時金彪は河南の杞県の籍貫とある。だが、福州の戦闘（一八六四年一〇月一四日）での再会以前の彼と張との交友の詳細は記されていない。

(3) 同治四（一八六五）年の春、時金彪が浙江巡撫馬新貽の官衙で武装警察の役人となった。張汝詳は福州で政府の

兵隊に入ったが、まもなく、李という姓の男の船で寧波に戻った。寧波では、妻の羅氏が呉炳燮に誘惑され、家に保管した銀貨を持って呉と共に出奔した。張は、寧波のすぐ南の鄞県の裁判所に訴えたが、判決は羅氏の再婚を合法としたため、憤慨した張は羅氏を無理やり家に連れ戻した。しかし、盗まれた銀貨は返ってこなかった。金に困った張は、昔馴染みに相談した。彼らは洋幣を提供し、張はそれを元手に再び小さな高利貸しを営んだ。昔馴染みとは寧波港の沖に暗躍する「海盜」集団である。

浙江の沿海地帯は舟山群島に面し、上下百キロに渡って武器を搭載した海賊船が、外国との交易船を含めた民間船舶を襲撃することでも有名だった。⁴⁸ 寧波は上海や揚州に次いで外国の領事館や商会が多かったのも、これら「海盜」集団は略奪した外国製の武器やアヘンを、ここで金に換えて巨利を得ていた。彼らの艦隊に乗って張は定海周辺で盗みを働いた。海盜たちはやがて、定海を南に離れた、象山と寧海の間にある南田の盜賊集団と行動を共にするようになる。張汶詳はそれには参加せず、寧波に戻った。

同治五（一八六六）年の旧暦正月、馬新貽が寧波に視察に來たことを知ると、張汶詳は、呉炳燮に妻と金を奪われたことを訴え、失くした銀貨を取り戻そうと考えた。しかし相手にされず、張は馬新貽を恨んだ。呉炳燮はそれを聞くと、張を公開の場で愚弄し、羅氏を拐かして再び二人で出奔した。張は寧波府と鄞県の裁判所に訴え、羅氏を取り戻したが、羅氏を激しく折檻し、羅氏は自殺に追い込まれた。旧暦九月、張は昔馴染みの海盜集団に、自分の苦しみを訴える機会があった。南田の盜賊集団に加わった仲間は馬新貽の弾圧でたくさん死んでいた。生き残った彼らは、義兄弟の仁義を果たし、個人の恨みを晴らすという二つの大義に基づく馬新貽暗殺を張汶詳に勧めた。

同治六（一八六七）年の旧暦七月、友人の陳養和が湖州の新市鎮で商売繁盛していると聞き、子女を羅氏の母親の

羅王氏に預けて、新市鎮で再び高利貸しを経営した。折から馬新貽總督の高利貸し禁止令が出されたところだった。非合法ではあるが小規模な地下店舗なら何とかなるだろうと考えた張は、部屋を借り、無認可で店舗を開いた。寧波から羅王氏と子女も呼び寄せた。ところが、新市鎮の無頼たちが、張の法律違反をばらすと脅迫し、金を強奪したので、元手を擦った張は極度の貧困に喘ぐことになった。

同治七（一八六八）年旧曆二月、杭州に立ち寄ると、時金彪はまだ馬新貽の官衙で武装警察の仕事をしていた。自分も雇ってくれないかと頼んだが、馬新貽はまもなく浙江巡撫から两江總督に栄転するため、無理だと言われた。

同治八（一八六九）年一〇月一日、馬新貽が两江總督の仕事を始めたのを知った（辞令は一八六八年九月二〇日）。⁴⁹時金彪はすでに山西巡撫の李宗義に従って京師に出かけた後だった。張は毎月二十五日（旧曆）に軍事射撃演習が行われるのを知り、九月二十五日（新曆の一〇月二九日）、總督本部前の通路を検分したが、警備が厳重なため、暗殺はまたの機会に預けた。

供述書の以上の部分は、張汶詳と馬新貽の運命が交差する始まりを示すものであり、また、張汶詳が馬新貽の殺害を決意するに至る動機を構成する最も重要な箇所である。

時金彪は浙江巡撫に就任した馬新貽の武装警察を勤めていた。太平天国の元軍人が浙江の官衙に就職できた背景は語られていない。しかし、この新事実によって、張汶詳が、吳炳燮を馬新貽に直接告発に及んだという不自然な行為の謎の一斑が解ける。巡撫という地方の最高指導者の嚴重な警護を掻い潜って、彼が告訴状を巡撫の乗った轎に投ずることができた理由も分かる。馬新貽を警護した時金彪が、友人の告訴状が巡撫の元まで無事届くように骨を折ったのであった。

張汶詳は、馬新貽が浙江巡撫に就任した直後に、福州の官軍に職を得ている。「籌備浙省边防飭遊擊張政順招勇簡練片」（同治四年正月十五日、一八六五年二月一〇日）にあるように、赴任早々、馬新貽は自らの軍団の創設を試みた。蒋益澧の部下である遊擊の張政順に、寧波での軍隊の訓練を命じ、閩浙総督の左宗棠の指導の下、福建における太平天国軍の掃討に向けた越境部隊を派遣したのである。⁵⁰ 左宗棠はすでに次のような憂慮すべき事態を馬新貽に手紙で知らせていた。「李世賢と汪海容の逆賊は福建と浙江の境界におよそ十万人が侵攻し、広東の太平天国軍もまたこれに呼応しようとしている。これに対して、浙江の官軍で福建攻撃に従事する数はわずか二万二千人である。⁵¹」馬新貽が創出した「八旗、緑營、勇丁」からなる千名の浙江越境軍団は、その危機を救済すべく、衢州に駐屯する左江鎮総兵、高連陞の部隊の戦力を補うものだった。

張汶詳が入隊した福州の官軍は、この張政順の浙江越境軍団と連携し、福建と浙江の境界山岳地帯で軍事活動を展開したはずである。ところが、張汶詳はここをすぐに除隊となり、寧波に戻って昔馴染みの「海盜」集団の仲間入りをしてしまう。政府の役人からお尋ね者に転換したわけである。それが何時のことかは供述書からは分らないが、この「海盜」集団を一斉摘発した馬新貽の奏摺に照らせば、一八六五年の七月であろう。⁵² わずか五か月の宮勤めだったわけだ。

五 海盜集團の張汶詳と山西の時金彪

張汶詳という無頼は、体制側と反体制側の間を自在に往来する不思議な能力を持った人物であるから、わずか五か

月で役所を辞めたことは取り立てて驚くべきことではないのかもしれない。しかし、寧波に戻った結果、彼は呉炳燮という悪党に遭遇して、妻と財産を奪われ、人生の幸福を一挙に失ってしまうのだから、この突然の進路の変更は、余りにも高く付くものだったことは否めない。この人生の暗転が、呉炳燮の悪行を弾劾する訴状を一笑に付した馬新貽への義憤を呼び、延いてはこの政治家の殺害を固く決意するに至るという一連の流れを生んだ。張汶詳の刺殺事件に「首謀者」は存在せず、全ては彼が一人で計画したものだということを主張したいのなら、これほど都合な物語はない。

しかし、張汶詳が妻と財産を必死に守ろうとしていた一八六五年から六六年にかけて、その眼と鼻の先で政務を執っていた馬新貽の関係文書を繙いてゆくと、そこには、南田の海盜事件の他に、幾つもの興味ある資料が見付かるのである。張汶詳は福州から寧波に戻った後、寧波より南にある象山と寧海一帯の沿岸地帯の海盜仲間となるが、彼らにより強大な南田海盜集団に加入した際には、それに加担することなく再び寧波に帰ったと言う。一八六五年後半のことである。その時期、張汶詳が戻った寧波とは反対側にあった、浙江南部や東部では、幾つかの重大事件が起こった。一つだけ例を挙げよう。

同治五年三月七日（一八六六年四月二日）、浙江の台州府で徐大度が蜂起した。徐大度は咸豐十一（一八六一）年に台州が太平天国に占拠されてより、太平軍に属して、台州から南へ二十五キロの太平県を攻略した。同県は国内外の貿易船が出入りする海港であったため、その逮捕は困難を極めた。のみならず、徐大度は私塩の集積地である同県の潞橋鎮をも占拠し、塩の密輸に従事した。そこで知府の劉璈は塩税局の抜き打ち調査を行った。不意を突かれた徐大度は塩税の値上げ反対を掲げ、周辺の塩梟千余人を結集して暴動を起した。馬新貽は水陸の官軍から成る連合軍

を派遣し、提督の黄少春に叛乱者の逮捕を命じた上で、以下の指示を出した。各營を広い範圍で展開して、一網打尽にする前にまず叛乱者を好きに暴れさせよ。そして、黄巖鎮の総兵である丁泗浜に命じた。各府県と連携してスパイを買収し、彼らを四方に放って、叛乱が広がった時点で一齐に暴徒を捕らえよ。こうして、二十名を越える首領が逮捕された。地下に潜伏した徐大度も六月十五日、新橋にて捕縛された。⁵³

台州における塩梟の叛乱は、この地域を席卷した李世賢や汪海容の役割を無視して語ることはできない。張汝詳は李世賢の部下であった。寧波のすぐ南で起ったこれらの叛乱と全く無縁ではなかったであろう。張汝詳の一八六五年から六六年にかけての行動を、象山や寧海の海盜だけに関連付けて論ずる供述書には、ある種の作為を感じざるを得ないのである。

(4)しかし、最終調書が明らかにした新事実で、最も重要なものは、同治八（一八六九）年一〇月一日、馬新貽が両江總督の仕事を始める前後に、時金彪が山西巡撫の李宗羲に従って京師に向かったという出来事である。

李宗羲は四川の開県の人。道光二十七（一八二七）年進士。塩政のエキスパートであった。李宗羲がこの時期、山西に派遣されたのは、河東塩と花馬池塩の収税権の確立を期待されたからである。捻軍やイスラム教徒の叛乱で、塩の流通ルートは寸断され、塩税に支えられた山西の財政は壊滅的な打撃を受けていた。曾國藩が手塩にかけて育てたこの切れ者の護衛に時金彪が選抜されるに当たっては、時金彪のかつての上司、馬新貽の推輓に依るところが大きい。

李宗羲と時金彪が赴任した頃の山西の状況をざっと俯瞰してみれば、次のようになる。⁵⁴

同治七（一八六八）年二月二日、イスラム教徒の叛乱軍と共に甘肅と山西を転戦していた西捻軍の首領、張宗禹が

直隸を襲った。二月八日、京師が嚴戒態勢に入った。陝甘總督の左宗棠は二月一五日、山西から直隸の饒陽に急行し、欽差大臣李鴻章と共に、夏季の増水した黄河と運河を堰き止め、張宗禹の西捻軍を山東の東昌府と曹州府の大運河沿いに追い詰めた。八月一六日、張宗禹は荏平で亡び、一八五三年から一五年に及んだ叛乱が収束した。神機營提督の陳国瑞もこのとき山西に出兵していたが、西捻軍が直隸の靜海から滄州一帯を侵し、京師に危機が迫ったことを知ると、山西巡撫の鄭敦謹を通じて北上救援を志願した。宮廷はその願いを許さなかった。しかし、閏四月（新曆六月）には、陳国瑞は鄭敦謹に無断で山東の臨清に赴き、安徽巡撫の英翰に直談判して西捻軍攻撃に参加することを求めた。神機營王大臣は陳の軍法違反を弾劾し、彼の提督職を解いた。ただし、英翰の嚴重な監督の下で従軍することを許した。⁵⁵ 八月一六日の西捻軍殲滅作戦で陳国瑞の果たした役割は大きい。この戦功により、彼は提督の職位に復帰し、やがて天津教案に代表されるキリスト教騷擾事件の行方に大きな影響を及ぼすのである。

李宗羲が赴任する三か月前の三月二五日のことだが、劉松山の率いる老湘軍が、山西から黄河を越え陝西の綏徳に達したとき、クーデターが勃発した。湘軍内にいた哥老会の仕業と言われる。三月三一日には、甘肅の慶陽にある楊店で、楚軍提督の高連陞が率いる部隊がクーデターを敢行した。三年前には左江鎮総兵として馬新貽總督の軍団を補佐する任を担った高連陞は、反逆者たちに殺害された。綏徳で難を逃れた劉松山も一八七〇年二月一四日、今の銀川に近い靈州の金積堡という要塞で戦死した。

山西巡撫の鄭敦謹がその直後の五月三〇日に書いた奏摺は、クーデターの原因について示唆するところが大きい。彼は、山西官衙の人員整理を早急に行うべきことを主張した。山西按察使の陳湜は黄河の治水に失敗し、西捻軍の侵攻を招いたため、降格のうえ新疆に流罪と決まったが、一年余りの職務態度が実直勤勉であるのに鑑み、流罪の処分

を取り消し、麾下の楚勇を率いて陝甘総督の左宗棠の軍営に参加し、功業を立てるように望む。『実録』同治八年四月十九日に記す通り、宮廷はこの鄭敦謹の意見を認可した。⁵⁶ 山西における叛乱やクーデターは、黄河の河道を制御するのに失敗し、哥老会や捻匪といった塩梟集団の跋扈を許したことに、原因の一端があったのである。

二つのクーデターの余燼は広い範囲に及んだ。李宗羲到着の二週間後にも、山東で世間を震撼させる事件が起きている。一八六九年七月二三日、潘鼎新が率いる淮軍鼎字五営が、捻軍を平定したばかりの山東韓莊でクーデターを企て、大運河沿線の商舗を襲った。漕運総督の張之万は、潘の部隊を安徽に帰還させ、潘鼎新を監視下に置いた。主犯は処刑され、鼎字左営は解散を命じられた。淮軍の武将、潘鼎新は李鴻章の麾下にあったが、その前身は曾國藩の幕僚である。

潘鼎新部のクーデター直後に山西入りした李宗羲は、四月三〇日付で、左宗棠に弾劾革職された李慶翱を八月三〇日付で按察使に再起用した。『清史稿』卷四百二十三、列伝二百十の「尹耕雲」の条には、水害対策に失敗した李慶翱は、弾劾に当たって直轄軍の給与を横領した罪を着せられたが、曾國藩の幕僚である尹耕雲との関係を力説して身の潔白を証明したと書かれる。⁵⁷ しかし、先に引いた『実録』同治八年四月十九日の記事によれば、李慶翱の弾劾者は左宗棠であり、その李を擁護したのは鄭敦謹であった。左の主張はこうだ。山西では冬の黄河防衛をできるだけ早くから行うべきだが、李の行政手腕ではその任に堪えない。だが、鄭敦謹は左宗棠の非難を退けたのである。

一八六九年一月二九日に出された上諭は、判断が二つに割れた同事案について、新任巡撫の李宗羲が李慶翱をすでに按察使に再起用した事実を追認し、李慶翱による冬の黄河の防備対策に十分な注意を払うよう李宗羲に命じた。⁵⁸ 時金彪は、一八六九年九月以降、この李慶翱が統括する水陸の黄河防衛軍に所属した。本人がそのことを自覚した

かはともかく、時金彪は左宗棠と対立した曾國藩の陣營の要員であり、彼をその陣營に送り込んだのは、馬新貽その人であった。

一八六九年に湘軍を襲ったクーデターの原因糾明は続けられた。時金彪の赴任より早い一八六九年八月二三日、北京宮廷が、曾國藩（直隸總督）、鄭敦謹（山西巡撫）、李鶴年（河南巡撫）に対して、「会匪」を取り締まる歩哨閑連の規則を制定するよう求める上諭を発している。⁵⁹

一八六九年一月二三日（同治八年十二月二十二日）には、陝西巡撫の劉典が、次の調査報告を提出していた。⁶⁰陝西の北山一帯は流民の避難場所となっており、土匪や除隊兵が群れをなしている。延安・榆林・綏徳も瘦せた土地である上、ここ数年の戦乱の被害が特に酷く、榆林はイスラム教徒軍に制圧され、難民、土匪、除隊兵、投降兵が巨悪を企んでいると。劉典の報告に付言すれば、延安・榆林・綏徳の西八十里にある花馬池からは塩が採れる。クーデターと塩は切っても切れない関係にあった。

同治九（一八七〇）年一月一日、曾國藩は、甘肅の花馬池に駐屯する直隸の官兵三千名の給与支払いの停止を建言した。左宗棠の掃討軍が進軍した以上、直隸官軍は撤兵すべきであり、それに伴い、直隸より毎月支給される銀一万五百両の内、山西軍に毎月充当すべき基本給与の銀五千両を除いた銀五千五百両の発給を停止したい。一方、山西出身の花馬池部隊の給与総額は銀で三万五千両である。発給を停止する銀五千五百両と合わせた約四万両の銀は、今後は、現地支給ではなく、中央の戸部から発給するよう改められたい。⁶¹

曾國藩の改革案の主眼は直隸の官兵の給与停止ではない。軍隊の必要経費はこれまで直隸と山西という二つの異なる財源から支給されていた。会計帳簿が複数存在することは腐敗の温床である。まして、山西は花馬池塩の管理とい

う責務を負っている。そこは、大量の物資が漕運によって荷積みされる交通の起点である。複数の資金の流れを、彼は、中央による一元管理下に置こうとした。曾國藩は湘軍、淮軍、楚勇といった自己の派閥が度重なるクーデターに晒されたことに危機感を持っていた。時金彪の給与がこの曾國藩の制度改正の影響を被ったことは言うまでもない。

張汶詳の供述書が明らかにした新事実をここまで四つ挙げた。その全ての時期を通じ、侍王李世賢、提督黃少春、福州の官軍に仕えた場面を除いて、張に確かなアリバイは皆無である。むしろ、張が氈帽や印子錢の販売に従事したり、その友人の時金彪が山西巡撫を護衛し、黄河防衛の軍属を勤めた事実は、彼らが、漕運において私塩の密売に従事する塩梟や、塩梟の出身者から成る捻軍や太平天国と深い関わりを持った人物であることを強く示唆する。

この推理が正確か否かを検証するためには、暗殺された馬新貽の過去との照合が必要になってくる。

六 馬新貽の秘められた過去

馬新貽、字は穀山。山東菏泽の人。道光元（一八二一）年生まれ。道光二十七（一八四七）年進士。同治九（一八七〇）年卒。享年四八歳。

両江総督まで上り詰めた馬新貽の伝記は、『清史稿』（巻四百二十六、列伝二百十三）と『清史列伝』（巻四十九、大臣画一伝檔後編五）に収録されるが、同治三（一八六四）年の浙江巡撫就任以降が詳しく、それまでが過度に簡略であるという共通の特徴を持つ。同治三年より前の記述は、官職の淡々とした羅列と言って良い。（以下、『清史列伝』の引用年月は全て旧暦。）

咸豐二（一八五二）年、安徽建平県知県。次いで、合肥県知県。

咸豐五（一八五五）年、廬州の逆賊を撃破、知州に昇任。九月、柘皋の匪賊鎮庄の功で（安徽）直隸州の知州補用。十一月、廬州奪還により、花翎を賞与。

咸豐六（一八五六）年十一月、安徽巡撫の福済の推挙により、欠員補充で安徽知府に特旨任命。十二月、安慶府知府。

咸豐七（一八五七）年七月、廬州府に異動。十月、捻軍が太平天国と連合して桃鎮を陥落させ、上派河と中派河を擾乱したので、新貽はこれを撃退し、賊を舒城に破り、入城。軍機処に道員任用を記名。

咸豐八（一八五八）年、按察使代理。賊が廬州に侵攻し、新貽は団練の軍団（練勇）を率いて廬州から出撃したが、賊は間道より入城し、新貽の軍は壊滅して、官庁の印判類を紛失した。これが問題とされ、革職留任が命じられた。

咸豐九（一八五九）年、母の死にあうが、安徽巡撫の翁同書は、新貽の留任を求め、認可された。

咸豐十（一八六〇）年、欽差大臣袁甲三が、団練の組織と賊の征討において新貽の功績が顕著なのに鑑み、その役職復帰を求めた。

咸豐十一（一八六一）年二月、翁同書が、新貽の世評の高さを理由に、廬州府知府および道員候補とするよう求め、いづれも許された。三月、父の死にあうが、袁甲三は、その才の得難きをもって、特別に百日以内の官職復帰を上奏し、認可された。次いで、籍貫地（山東菏泽）にて団練を組織した。

同治元（一八六二）年、安徽の軍営に赴き、大軍と共に廬州に帰還し、賊の秘密拠点を追撃し、寿州（寿春）の呉山廟で大勝、按察使相当資格を賞与された。次いで、布政使代理となった。時に造反団練の苗沛霖が反旗を翻し、新貽は安徽巡撫の唐訓方と共に蒙城、臨淮などを防衛し、著しい戦功を挙げた。

同治二（一八六三）年三月、按察使に拔擢さる。九月、布政使に拔擢さる。⁶²

以上の叙述の中で、唯一読者の注意を引くのが、咸豊八年の「新貽の軍は壊滅して、官庁の印判類を紛失した」という記載であろう。『清史稿』の文言も全く同じである。ところが、郭廷以の『太平天国史事日誌』は、一八五八（咸豊八）年八月二三日（旧暦七月十五日）の条で、さらに踏み込んだ記述をした。

前軍主将陳玉成、左軍主将李世賢および呉如孝は安徽の廬州府を占領し、総兵の蕭開甲、遊撃の黄国堯、知府の伍成功を斬った。安徽布政使の李孟群は敗れて六安州に退き、知府の馬新貽は身を隠して捕縛を免れた。⁶³

郭廷以は、ここに太平天国の軍団の長しか列挙していないが、このときの廬州攻撃には捻軍が参加した。その総指揮官は白旗総目の龔得樹であった。廬山府知府の馬新貽は、太平天国の陳玉成、李世賢、呉如孝の軍に敗れた後、「身を隠し」と言う。この記述は、馬新貽が「官庁の印判類を紛失した」という正史の記述とどのような関係を持つものだろうか。そもそも馬新貽はどこに身を隠したのか。身を隠したにもかわらず、廬州府の印判を押した公式文書が一定期間、官衙の世界に流出したのは何故か。これらの秘密を解く鍵は、馬新貽の実弟、新祐が編んだ『馬端敏公（新貽）年譜』の中にある。

『馬端敏公年譜』は光緒三年丁丑冬十月、すなわち一八七七年一月に刻印された。非業の死を遂げた兄を顕彰するため、馬新祐は七年の歳月をかけて、この年譜を仕上げた。兄の業績を必要以上に美化する傾向は避けられない

が、驚くほど忠実に微細な事実を記している。咸豐八年の出来事も例外ではない。

八年戊午、三八歳。廬州府在任。（昨年の捻軍との激戦を受け——引用者注）軍団の將校たちを慰問し、戦没家族を慰撫した。廬州内の食糧が乏しく、より多く備蓄して戦争に備えようと、為政者が民衆より過度に調達したため、供出が追いつかないことを深く憂慮した。旧曆六月、按察使を兼任せよとの辞令を奉じた。ときに鄭魁士統帥が江寧赴任の命を受けたため、副都統の麟瑞公が廬州の軍務を引き継ぎ、李孟群公が代理巡撫に、張光弟公が布政使となった。廬州には正規兵と団練が僅かに数千しか残っていなかった。七月十二日、偽英王陳玉成の賊衆数十万が廬州に侵攻した。新貽公は団練を率い、麟^{マツ}統と共に城外に敵を攻撃すること三日に及び、若干の捕虜を得た。十五日、賊の大軍を七里站に迎え撃ったが、賊は背後の間道から部隊を分けて包圍攻撃したので、公は^{マツ}統と分断されてしまった。団練は公を護衛しながら囲みを突破しようとした。新兵の王金甲、馬夫の余根は戦死した。城内に突入し、見上げれば、城壁のひめがきに賊の軍旗が高々と掲げられている。公は怒り心頭に発し、もはやこれまでと思った。そこで馬を駆って城下に身を投げて死のうとした。そのとき、団練には秦広禎、余祥など三名の騎馬兵しか残っていなかったが、公をしっかりと抱き留め、相擁して大声で泣いた。かくて、新たに巡撫となられた翁同書中丞がいる梁園まで急行し、それから翁中丞と一緒に定遠まで行つて、自らの処分を仰いだ。翁中丞は民衆が新貽公を深く敬慕していることを理由に、革職留任を上奏、廬州府の行政に残し、合わせ按察使の職に留めて、安徽北部の団練の最高責任者とした。⁶⁴

咸豐八年七月十五日、すなわち郭廷以が「知府の馬新貽は身を隠して捕縛を免れた」と書いた一八五八年八月二三日、麟瑞と共に廬州城から出撃し、陳玉成、李世賢、吳如孝の大軍に決戦を挑んだ馬新貽は、間道から城内に侵攻した太平天国・捻軍の連合軍に挟撃され、麟瑞の軍団と分断された。これに続く馬新祐の叙述は、一読しただけではその真意を掴み兼ねるほど錯綜している。

城内に突入し、とある。城内はすでに太平天国と捻軍に占拠されていた。馬新貽がそのことに気付いたのは、城内に突入した後であつたと言う。「もはやこれまでと思つた」のは当然で、城内に孤立した彼を待ち受けるのは、賊による逮捕と処刑しかない。しかも、このとき彼と共に城内に突入したのは「秦広禎、余祥など三名の騎馬兵」に過ぎない。つまり馬新貽と合わせ、四人の廬州府將校が事実上、太平天国・捻軍の捕虜となつたのである。

この四人の捕虜は、馬新貽、秦広禎、余祥だけがその氏名を記載されている。なぜか、馬新祐は残る一人の氏名を明記していない。城下に投身自殺しようとする馬新貽を秦広禎、余祥、そして氏名不詳の三名が泣いて止めた。その後、舞台は一転して、馬新貽は何事もなかつたかのように、新任の安徽巡撫、翁同書が駐屯する梁園に避難し、そこから廬州を北北西に二十五キロ離れた定遠まで翁同書に同行している。

翁同書は八月三十一日、梁園に進駐した。捕虜から解放された馬新貽はこの日を過ぎること遠くない日に梁園に避難したと思われる。「官庁の印判類を紛失した」と正史が書くのは、八月二三日の拘束からここまでの期間の出来事であろう。馬新貽は廬州で捕虜となり、この間ずっと「身を隠して」いたのである。もはや明らかだが、馬新貽は叛乱軍に投降した。そして、官軍の機密情報を提供することを条件に釈放された。七月十五日（新曆八月二三日）を境に、馬新貽は、太平天国と捻軍に内通するスパイとなつたのである。

呉如孝と龔得樹は廬州攻撃を成功させると、北西二十五キロの藕塘鎮を占拠し、そこから定遠への攻撃を開始した。九月一日のことであった。次いで、龔得樹は定遠から西へ三十五キロ離れた寿州に向け一〇月二四日に進軍し、定遠はようやく叛乱軍の猛攻より解放された。馬新貽はこれ以後、三河鎮の李統賓の救援に向かうが、再び孤立し、定遠への撤退を余儀なくされる。

廬州の城内への突入を馬新貽に進言したのは、秦広禎、余祥、氏名不詳者の三人である。けれども、城内が叛乱軍に制圧されたことは、城の内外から挟撃された時点で馬新貽たちには明瞭だった。城内に突入した後で、城壁のひめがきに掛かった賊の軍旗を見て、初めてそのことに気付いたのではなかった。だとすれば、馬新貽の投身自殺を泣いて止めた三人は、馬新貽の身柄を拘束し、城内まで連行した張本人と言わねばならない。馬新貽が叛乱軍のスパイになる前から、彼が組織する団練は捻軍や太平天国の諜報員に支配されていたのである。

年譜を通読すれば、秦広禎、余祥という諜報員が、もともと以前から馬新貽の親衛隊の成員だったことが判明する。余祥は咸豊五（一八五五）年に合肥で組織された「捷勇」の一員であった。秦広禎は、咸豊七（一八五七）年七月、廬州の戦場で「寿勇」の親衛隊員として登場する。

七 「秦広禎、余祥など三名の騎馬兵」

咸豊八年の出来事は、馬新貽の団練が捻軍や太平天国の諜報員に支配されていた事実を白日の下に晒したが、彼らは何時から、どのようにして、馬新貽の世界に浸透するに至ったのだろうか。

馬新貽は道光二十七年（一八四七）年の殿試合格者であつた。三甲六名（総合一三四位）といふから、成績は芳しくない。⁶⁵

この年の殿試合格者二百十五名は、清末の政治を代表する錚々たる人物を含んでいる。状元（トップ合格）は、馬新貽刺殺事件の第二回特搜部を率いた張之万。李鴻章、三〇位。沈葆楨、三二位。何璟、三七位。郭嵩燾、四二位。陳鼐、四四位。丁寿昌、五六位。李宗羲、九四位。馬新貽、一三四位。李孟群、一三九位。朱次琦、二二二位。李鴻章から李宗羲までの七人は曾國藩の幕僚、朱次琦は康有為の師である。

最高の出世が約束される翰林院庶吉士は上位五十六名。この年の合格者では丁寿昌までであり、これが今で言うキャリア組に当たる。馬新貽は翰林院に残れず、地方巡りからその官界の生活を始めた。それが期せずして馬新貽の特異な政治能力を開花させることになった。

道光二十八（一八四八）年、進士になったばかりの馬新貽は安徽の安慶府に赴任した。道光二十九年には、そこから北方の泗州、太和に異動し、咸豐元年四月、潁州府の亳州に転任する。

亳州は、洪澤湖を水源とする渦河が、安徽の北方を西へと横断した河南との境界に位置する。馬新貽が赴任した咸豐元（一八五二）年は、太平天国の広西での蜂起に刺激されて、渦河一帯で私塩の密売に従事する塩梟が捻軍を組織し、急速な拡大を見せた年である。

年譜によれば、馬新貽は亳州で鄧鶚という大地主の無頼を改悛させ、彼の力を借りて、県の東北の観音堂を占拠する「土棍」の李大洪、李二洪を逮捕した。河南から送られた私塩を、渦河の南を並行して流れる潁河の太和県にいた塩梟から奪い取ったため、河南の商邱の塩梟が怒って鄧鶚を捕まえに來たときも、馬新貽は鄧鶚に多額の懸賞金を懸

けて補導し、彼の身の安全を守った。馬新貽が塩梟に寛大である噂を聞き、捻軍内の有力な首領である朱洪武（朱洪占）、劉万鎰、張松などが帰順した。

この馬新貽が体制側へと帰順させた鄧鴨とは、捻軍の首領の一人、鄧大俊を指すと思われる。このとき馬新貽の下に投降した鄧大俊は、馬が亳州を離れると、再び造反し、咸豊三年九月には、毫州の五十八人の首領を連合して、その四大天王の一人となったが、安徽布政使の袁甲三が率いる官軍に、雉河集近くの標里鋪で殺害された。⁶⁶

馬新貽が、その晩年に当たる一八六六年四月、浙江の台州で起こった徐大度の叛乱において各府県にスパイを一斉に放ち、彼らを囹に塩梟を逮捕したことはすでに述べた。スパイ工作を駆使した軍事作戦を、馬新貽は生涯得意とした。その原点は、捻軍の首領、鄧鴨の懐柔策の中にあると言えよう。

咸豊二年十一月、馬新貽は江蘇、浙江と境界を接する安徽広德州の建平県に赴任した。張汶詳事件に深く関係する太湖と湖州に近い。

咸豊三年、太平天国の度重なる攻撃に悩んだ末、馬新貽は建平から十キロ離れた東夏にて義勇兵を募集し、団練を作って、軍事教練を始めた。

咸豊四年には、自らの団練を率いて、廬州に進軍し、そこでの戦功を認められて、鳳陽府の定遠の知県に就任した。

咸豊五（一八五五）年正月、廬州府の合肥県の知県代理となり、合肥に近い店埠鎮に進駐する。二月、店埠にて三百名の義勇兵を募集し、店埠から五キロにある撮城鎮で正規軍を創設した。ちょうど、王二條という人物が訴訟に負け、獄に繋がれていた。馬はこの王が地元の情勢に明るいことを知り、彼を保釈させて、長樂河で百名から成る親衛隊（勇）を作らせた。

馬新貽は太平天国と捻軍に占拠された三叉河を奪還しようとした。自らは正規軍を率い、王二條は親衛隊を指揮して、二手に分かれて敵を殲滅した。王二條の親衛隊はこの戦功により、以後、「捷勇」を名乗った。巢湖の救援でも「捷勇」は果敢な働きをし、正史にもあるように、九月、馬新貽は廬州の知州に昇任した。江南提督和春と安徽巡撫福済の求めに応じて、廬州の北、柘皋に出兵した際も、叛乱軍を大敗させ、馬新貽は建平県の知県から、安徽の直隸州知州補用となり、王二條もまた六品の軍功により蘭翎を得た。

十月一日、大清軍は廬州を太平天国より奪還した。大清側は大量の密偵を廬州の城内に送り込み、夜中に城内に火を放って、城外と呼応の上、陥落させたのである。馬新貽が「捷勇」を組織させた王二條も、そうした密偵の一人であつたと考えられる。

廬州解放後、知府の金光筋は馬新貽を廬州に招き、叛乱軍の鎮圧協力を求めた。西南の土匪を掃討するに際し、金光筋の麾下の「寿勇」は五百名に増員され、馬新貽の「捷勇」もまた五百名にまで膨らんだ。「寿勇」と「捷勇」はこの遠征で二百名以上の著名な匪首を逮捕した。

咸豐六年、金光筋が「寿勇」を伴って廬州から転出したので、馬新貽は「捷勇」の一部を割き、余祥と張海山に命じて、新たに四百人規模の「寿勇」を寿春で組織させた。

咸豐七（一八五七）年七月、安慶の知府から廬州の知府に異動し、「寿勇」を率いて、鮑起彪と共に賊を中派河に破った。西北にいた土匪（捻軍）である、にきびの沈五が蜂起したので「寿勇」によって退け、東郷に要塞を築いた。合肥の大令、王俊が「捷勇」を率いて、にきびの沈五を攻撃したが、撃退されたので、馬新貽は廬州の防備を王俊に任せ、自ら「寿勇」と「捷勇」を伴い、沈五との決戦に臨んだ。三日に亘る激戦で、撮城鎮から借りた大砲を放

つと、沈五是夜を徹して寿州（寿春）との境界まで逃げた。だが、追撃した官軍が壊滅してしまい、馬新貽は親衛隊の秦広禎たち十余人と共に敵の大軍の中に孤立した。

この存亡の危機において、「寿勇」の首領、江懷仁が叫んだ。「馬太守は寿州の民衆が災いに遭うことを憂えて、ここまで来られた。我ら寿勇がその気持ちに応えずにおれようか！」

「捷勇」の首領、余祥も叫んだ。「戦陣にあつて勇氣を欠き、主を見捨てて遁走することなど、命に誓ってあり得ない。」⁶⁷勇練がこうして起死回生の反撃を試みた結果、にきびの沈五の叛乱軍は首領の沈五を捕縛して馬新貽に差し出し、降伏した。周辺の捻軍も沈五の逮捕を聞いて、投降を申し出た。安徽巡撫の福済は、馬の功績を評価して、軍機処に道員任用の記名を申請した。

「捷勇」は咸豊五年二月、捻軍の元指導者であつたと思われる王二條の創建になる義勇軍であつた。一方、「寿勇」の方は廬州知府の金光筋の親衛隊に由来するが、金が廬州を去った後、大規模な軍団再編を経て、馬新貽の麾下に属したものである。「捷勇」の余祥は、このときの再編を担当した一人である。彼は、王二條が「捷勇」を作った時から最古参の軍人であつた。廬州周辺の捻軍の戦士出身であつたに違いない。咸豊七年の沈五との生死を賭けた戦いでは、「捷勇」の首領として部隊を率いている。一方、秦広禎は、これら「捷勇」や「寿勇」から成る馬新貽の親衛隊を統括する立場にあつたと見える。したがって、秦広禎も余祥と同じく、最古参の捻軍出身者であろう。咸豊八年の狙い澄ました馬新貽の捕縛劇を見れば、二人が白旗捻軍総目、龔得樹の部下であつたことが判る。

咸豊八年八月二三日、馬新貽を廬州城内に監禁し、その印判類を奪つたのは、咸豊五年二月に王二條の周辺にいた捻軍兵士だつた。「秦広禎、余祥など三名の騎馬兵」は、馬新貽と義兄弟の固い契約を結んだ。廬州でこの四人が孤立

し連行されたのは偶然の出来事ではなく、四人の自発的な意思に基づく行為である。ここで、最初の問いに戻らなければならぬ。四人の義兄弟のうち、氏名不詳の一人は何者か？ 年譜はなぜ、この人物の氏名だけを伏せたのか。

年譜の作者、馬新祐が、もしこの氏名不詳者を歴史の記憶から抹殺したいのなら、「秦広禎、余祥の二名の騎馬兵」と書けば済む話である。しかし、馬新祐は、そうしなかった。この人物が存在した事実そのものを抹消することはできなかった。咸豊八年七月十五日に、この人物が兄の側にいなければ、兄の命はそこで消えていた。その後の官界における異例のスピード出世はあり得なかった。その意味からすれば、この氏名不詳者は間違いなく兄の恩人である。しかし、この氏名不詳者は、結局のところは、兄や自分を含めたその家族を不幸のどん底に陥れたのである。この人物を馬新祐の世界から抹殺することはできない。兄の歩んだ世界に永遠にその痕跡を残さざるを得ない。同時に、その実名を決して明らかにすることがあつてはならない。その名は、兄の生涯の記憶の中で、最もおぞましく、最も汚辱に塗れたものであるからだ。この氏名不詳者とは「張汶詳」である。

咸豊五年に義兄弟の契りを結んだのは、年譜では、馬新祐、秦広禎、余祥、氏名不詳者とあるが、これは、馬新祐、時金彪、余祥、張汶詳に改めるべきである。

年譜では、秦広禎（時金彪）の名は咸豊八年で消え、余祥の名は同治元（一八六二）年で消える。同治元年の余祥の肩書きには、もはや親衛隊「捷勇」の名は冠せられない。廬州の有力団練である蒯德模、蒯德標の一族と並んで列挙されるのみである。知府の親衛隊としての「捷勇」はすでに解散し、地域の防衛戦力へと再編されている。余祥のその後の足取りは分からない。

年譜は問わず語りに、張汶詳と馬新祐の交流が咸豊五（一八五五）年以來のものであることを暴露した。張はこの

時期、時たま浙江の家庭に帰り、氈毛の販売や印子銭の高利貸しを経営したが、その主要な時間のほとんどを、馬新貽の義兄弟、親衛隊「捷勇」の首領として生きたのである。この張汶詳の妻を奪ったのは海盜の一味、呉炳燮ではなく、馬新貽その人である。張汶詳の粘り着くような殺意は、そう考えて始めて理解できる。この張の人生の節目の時期に、何処からともなく姿を現し、不思議な力で張を馬新貽の世界へと誘っていった時金彪は、馬新貽の元親衛隊長であり、張汶詳の上司であった。時金彪が山西巡撫に決まった李宗羲の護衛を勤めたのは、道光二十七年科挙同期合格組であつた馬と李の關係から説明することができるのは確かだ。しかし、それ以上に、時金彪が、かつては秦広嶺という名で、親衛隊の総指揮を執つた武装警察のエキスパートであつたことに依っている。しかも、彼は龔得樹の部下として、塩の密売に関与していた。馬新貽は、塩政の表と裏を知悉した人物を、李宗羲というやはり塩政のエキスパートに推薦したのである。河東塩や花馬池塩の流通ルートを安徽や河南に連結する上で、時金彪の果たした役割は大きかつたであろう。塩の流通を管理する漕運總督の張之万が、馬新貽事件の重要参考人として時金彪を召喚するのに躍起となつたのは、暗殺事件のためばかりではなかつた。

八 方秉仁…馬新貽の護衛たち①

しかし、年譜は、馬新貽暗殺事件に関してこれに劣らず重要な事実を語っている。

同治二年三月二十四日（一八六三年五月一日）、大漢国の盟主、張樂行が安徽の亳州に近い義門集で義に就いた。彼は宿州の知州であつた英翰に捕縛され、欽差大臣センゲリンチンの司令部に送還されていた。捻軍は偉大な指導者

と雉河集の革命根拠地を失った。しかし、これより早く、三月十五日、苗沛霖がセンゲリンチンに反旗を翻し、安徽の懷遠（鳳陽府）と鳳台（寿春）を攻撃する。馬新貽はこのとき安徽按察使として蒙城にいた。

年譜には、三月十九日に、苗沛霖の大軍が蒙城に現れ、城壁に積み上げた土塁を突破するのを、馬新貽たちが二日ばかりで防衛する姿が描かれている。蒙城はすぐ北を渦河が東西に流れ、天然の要塞を形作っている。副将の李南華と遊撃の李得勝は、団練を率いて城外に出撃したが、苗沛霖軍団に弾き返されてしまう。

馬新貽はこのとき「捷勇」「寿勇」といった私的軍団ではなく、水師、冠字營、強字營、山字營などの正規の軍団を擁する軍事指導者に成長していた。山字營は「練勇」（自衛団）から成ると書かれているから、かつての「捷勇」や「寿勇」の親衛隊を官軍へと発展させたものであろう。もともと、もはや、ここに秦広禎や余祥の名前を見ることができない。

一か月に及ぶ壮絶な攻防戦の末、四月になると、苗沛霖の軍団は、蒙城を取り巻く河川を封鎖し、河道を運ばれる食糧物資を略奪し始めた。馬新貽は、麾下の軍団に、河道の奪還を命じた。

公は強字營の副将、程文炳たちを派遣して、それぞれ賊の軍団を個別撃破させ、各軍団を督促して、小澗集と胡家圩に立て籠もる賊の部隊を強制解散させた。かくて、河道は食糧を運搬できるようになった。一方、白家寨の包圍ははなはだ深刻で、救援部隊も蹴散らされたので、公は全力を挙げて攻撃し、これを破ったが、賊は次には、蒙城を一キロから一・五キロ離れた場所の地面を掘り、小さな要塞を綺羅星のごとくびつりと張り巡らせたので、公は部隊にそれらを埋めさせると共に、把総の方秉仁、衛守備の田濤、団練首領の鄧松、董致誠などに、馬家坡を徹底的に封

鎖して、敵を西へと逃亡させてはならないと命じた。⁶⁸

ここまで読めば、馬新貽が馬家坡に派遣した軍人の名前の中に、我々は張汶詳事件の重要参考人が含まれていることに気付く。それは、把総の方秉仁である。

彼は、同治九年七月廿六日、暗殺事件の当日、馬新貽の護衛を勤め、張汶詳を現行犯で逮捕した差弁守備である。方秉仁の供述は、白昼の暗殺事件を解決する上で最高度に重要なものであった。張汶詳が逮捕されたとき、群がる民衆に向かつて、張が「養兵千日、用兵一朝（兵とは一朝事ある時に備えて、長い準備を怠らないものだ）」と叫んだと陳述したのも彼である。⁶⁹凶器に使われたのが小振りのナイフで、しかもその刀身には毒が塗られていなかったと証言したのも彼であった。⁷⁰方秉仁の同治二年の官位は、正七品の把総と低いが、同治二年になって初めて馬新貽に仕えた訳ではないだろう。秦広禎や余祥と同僚だった可能性が高い。それに、年譜では、張汶詳は「氏名不詳者」で通っているのだから、秦広禎は咸豊八年から、余祥は同治元年から、それぞれ記載がないからと言って、氏名不詳者（張汶詳）が、蒙城の戦闘に方秉仁と一緒に参加しなかったという保証はないのである。にもかかわらず、方秉仁は自分と張汶詳の過去の繋がりについては如何なる供述も残していない。馬新貽が刺されたのを見届けてから張汶詳を逮捕したのは、事前の綿密な計画に沿った行動でなくて何であろうか。刀身に毒が塗られていないという証言も偽証であって、白昼の一撃で、馬新貽は即死せず、翌日、毒が全身に回って絶命したのは疑いようがない。方秉仁は馬新貽暗殺事件の共犯者であった。

さて、同治二年七月から八月にかけて、蒙城を取り巻く戦況は大清側にとつてますます絶望的になった。このと

き、ここから南の祁門で戦況を見守っていた曾國藩は、馬新貽の蒙城防衛軍の壊滅を危ぶんだ。

馬新貽の状況は確かに絶望的なものだった。彼はこの緊急事態に欽差大臣として安徽に派遣されたセンゲリンチン將軍に、外委の魏大用を派遣して、自らの窮状を訴えさせた。馬新祐によれば、魏大用の涙ながらの訴えは「將軍をいたく感動させた。」⁷¹センゲリンチンは、蒙城に一人の軍人を急行させることを決めた。その軍人とは陳國瑞であった。陳國瑞が蒙城に派遣される前後に、馬新貽は、多くの救援物資を得ている。まず、河南巡撫であった張之万が上海まで連絡して、江蘇巡撫の李鴻章に備蓄米の支給を求め、李鴻章はそれを快諾した。道光二十七年科舉同期合格の友情であろうか。

方秉仁や陳國瑞は早くから馬新貽の軍団に関係していた。年譜はその貴重な史実を書き留めていた。これと並んで、年譜が示すもう一つの特徴に触れておかねばならない。年譜は同治三年より前の事蹟について、多くの新事実を記載したが、書かれるべくして書かれなかったものがある。張汝詳を「氏名不詳者」としたのはその一例であった。他にも、馬新貽の安徽での戦闘に関係する二人の重要人物を、馬新祐は、故意に無視した。その人物とは、勝保、そして李世忠である。

咸豐八年に大清が廬州を奪還できたのは、欽差大臣勝保の秘密工作によって忠王李秀成の部下であった捻匪の李昭寿が滁州で勝保に投降したことによる。李昭寿は剃髪し、以後、李世忠と名を変え、四万人の部隊を解散して、その中の一万七千人で「豫勝營」を建軍した。李世忠は、河南固始の人。淮河北岸の運河に運ばれる私塩の支配者である。彼が塩の密売で得た莫大な資金は安徽の戦局を左右する真の原動力であった。同治元年から二年にかけても、苗沛霖と並んで李世忠は戦争の主導権を握っていた。苗沛霖が捻軍側に寝返ったことによって、安徽はこのとき、河南

と接する北部が再び捻軍に、長江北岸の南部が太平天国に支配されるという構図が現出した。安徽省の八割の領土が敵軍に沈んだのだ。馬新貽が交戦した廬州、蒙城、臨淮はその中間にあつて叛乱軍の奔流に翻弄された。この危機を救ったのもまた、李世忠であつた。

曾國藩はこの年の一月一日に、苦境に陥つた馬新貽に向け、慰問と激励の手紙を書いている。一万四千人の軍勢を従えた李世忠がまもなく救援に駆け付けるから、それまで何とか持ち堪えてほしいという内容であつた。

蒙城を救援する一万四千人は、その兵力が重厚で、さらにあの逆賊たちの水路や糧道を遮断しましたから、奮戦して包囲を解くでしょう。懷遠と鳳陽の団練は逆党を殺害して束縛から逃れようとしてました。苗沛霖に就く者たちは進んで逆賊に従っているわけではなく、官軍が手を差し伸べさえすれば、必ずやその脅威から逃れようとするに違いありません。李世忠軍門のこの度の救援は、真心からの銳意に満ちたもので、彼は必ず大功を立てます。昨日、諭旨を拝受し、センゲリンチン邸が河南の司令部に着いたそうですから、捻軍の討伐は張之万と毛昶熙の二人の將軍に任せて、部隊を率いてすぐにでも南下し、まずは蒙城の危機を救おうとするでしょう。淮河上流の軍事情勢に光明が射さうとしています。⁷²

曾國藩の幕僚、王闓運もまた戦史の傑作『湘軍史』の中で、このときの戦争を描くが、⁷³そこでの記載は、年譜の史実とは大きく食い違っている。馬新祐は、陳国瑞が蒙城の防衛に孤軍奮闘したと書いた。ところが実際は、富明阿と李世忠の淮河兩岸からの援護射撃があつて始めて蒙城の奪還が可能になったと言える。また、馬新貽は救援に駆け

付けた陳国瑞を置き去りにして臨淮に移るが、それが可能だったのは、臨淮が李世忠の救援部隊によって解放されたからである。もともと、寿州を解放するに当たり、蒙城の奪還では連携した陳国瑞と李世忠の軍団は激しい内紛を惹起するに至るのである。

年譜の記述は、総じて、陳国瑞に厚く、李世忠に冷淡である。咸豊八年の馬新貽が陥った絶体絶命の危機にあっても、彼が廬州から定遠へと無事に移動できたのには、李世忠が滁州より起って、安徽の交通の大動脈を攪乱したことが背景にある。しかし、その記述にも李世忠は全く姿を見せない。なぜ、李世忠、そして、この李世忠を帰順させた勝保は馬新貽の世界に現れては不都合なのだろうか。その秘密を解く前に、馬新貽の人生を通り過ぎた、方秉仁や陳国瑞と並ぶ、もう一人の秘められた人物について触れておく必要がある。

九 喻吉三…馬新貽の護衛たち②

光緒十六（一八九〇）年閏二月五日、両江総督曾國荃等の奏摺の一節に次の文言がある。「その卓越せる戦功をもつて、今は亡き総兵の喻吉三の事蹟につき、史館に立伝したことをここに宣布し、合わせ曾國藩の湖南、江寧等の専祠に祭文を付す。⁷⁴」

馬新貽が暗殺されたその日、彼の護衛隊長を勤めたのは、督標中軍副将の喻吉三だった。しかし、喻吉三は馬新貽の暗殺を防げなかった。張之万の第二特捜部は、彼を革職し、鄭敦謹と曾國藩の最終判決を受けた諭旨は、彼を二級降格処分にした。

彼の湘軍内で積み上げたキャリアは、張汶詳事件によって崩れ去った。出世の道を閉ざされた喻吉三の晩年は寂しいものであった。彼の死後、湘軍の元老、曾国荃はその戦功を讃える記念碑を兄の神道銘に付記することで、彼の生前の地道な貢献に報いようとしたのであろう。

曾国荃の奏摺に見る通り、この喻吉三は湘軍の古参幹部である。彼は太平天国との戦争では長江の河上での戦闘に長く従事した。

曾国藩の日記に、喻吉三が初めて現れるのは一八五八年七月一六日（咸豊八年六月初六日）、国藩が彼を自らの幕下に登用したその日であった。八月二六日（七月十八日）には、従軍兵の食糧管理の部署（護理糧台）に任命された。一八五九年二月三日（咸豊九年正月初一日）、江西の建昌宮の遊撃として、国藩の新年慶賀の衙門龍牌拝賀に同行した。⁷⁵一八六三年四月二九日（同治二年三月十二日）、馬新貽が安徽の廬州で苗沛霖の猛攻に晒された頃、湘軍の護軍二營の喻吉三は、安徽を流れる長江南岸の池州への派遣を国藩に命じられる。⁷⁶旧暦九月、安徽の廬州や寿州が陳国瑞や李世忠の進撃により解放された。一八六四年二月四日（同治二年十二月二十七日）、曾国藩は、青陽解放の功績により喻吉三への二品封典の賞与を願い出た。⁷⁷対照的に、李世忠は、寿州解放後の陳国瑞軍との内紛、正陽関解放後の蒋凝字軍への発砲事件の責任を取る形で、国藩より安慶にて「豫勝營」の解散を命じられた。⁷⁸

太平天国滅亡後の一八六四年九月二七日（同治三年八月二十七日）、彭玉麟が長江水師の提督を退くに当たり、安慶の提督衙門の後事は、浙江巡撫の馬新貽、安慶按察使の何璟、記名総兵の喻吉三による協議に委ねられた。⁷⁹喻吉三は、このとき湘軍から馬新貽の幕下へと異動した。職務は長江水師に関わるものである。それから六年後の馬新貽暗殺時、喻は督標中軍副将として江寧の陸上部隊で勤務していた。彼は水師から陸軍へと異動している。この異動に

は、太平天国滅亡後の長江水師の大規模な組織再編が関係している。

同治元（一八六二）年に設置された長江水師は、曾國藩が創設した湘軍水師を改編したもので、提標五營から出発し、同治五（一八六六）年には、提標五營に加え、湖南岳州鎮標四營、湖北漢陽鎮標四營、江南瓜州鎮標四營、江西湖口鎮標五營が増設されて、二十二營となった。総人員一万二千人を擁するこの一大軍事集団に対する大清の警戒心は強く、曾國藩は太平天国を滅ぼした後、その人員と経費の削減を求める強い圧力に晒され続けた。

『清史稿』卷百三十五、志百十、「水師」には、この長江水師の変遷の概略が示されるが、特に目を引くのが、同治八（一八六九）年に部臣會議が曾國藩の建議に基づいて策定した改正案である。⁸⁰ 江蘇水師を内洋・外海・里河の三大系列に分ける案であった。内洋は、沿海の海港と内河を繋ぐ中継水域を防衛し、外海は、海港周辺の安全保障を確保し、里河は、大運河を中心に大小無数の河道における治安対策を行うのである。

里河水師は、従来の提標右營、太湖左營・右營の三營に、淞北營、淞南營を加えて五營とし、提督の監督下に置く。太湖七營は里河五營に改編し、その余剩定員の再雇用は提標の裁量に任せる。

両江総督を曾國藩から受け継いだ馬新貽は、以上の曾國藩の原案にさらなる改訂を加えた。九江水師は城守營に改められ、陸と汎（増水期に水没する陸地）に四か所が設置された。鄱陽營を陸と汎の二か所に改編し、洞庭水師を龍陽城守營と改め、岳州水師の營については水兵を配置換えして、陸路管轄とした。

馬新貽の再編案を一瞥すれば、喻吉三が、なぜ安慶の長江水師本部詰めから、江寧の武装警察の仕事に異動したかが理解できよう。馬新貽は両江総督に就任してから、曾國藩の長江水師（湘軍）削減計画をさらに推進し、そこで生まれた余剩人員を、長江下流域の陸軍と警察の増強に充てたのである。この人事異動はかなり大規模なものであつ

た。馬新貽の奏摺「酌調額兵添給津貼立營操演摺」（同治八年七月十七日）によれば、督標の中營・左營の二營、城守左營・右營の二營から千人、浦口・瓜州・奇兵の三營から五百人、瓜州・奇兵・揚州・泰州の四營から五百人、合計二千人を江寧城の各地に駐屯させるという計画であった。⁸¹

再編案は、長江水師の中でも、江蘇水師を構成する揚州、浦口、瓜州、泰州の部隊を狙い撃ちしている。曾國藩の改革によって、すでに太湖七營に過度に集中した利権の寡占体制は崩れていた。馬新貽が追加した再編案は、それに追い打ちをかけるものである。喻吉三は、水師と陸軍での従軍経験がほぼ拮抗していたから、まだ良い。浮かばれないのは、長江水師の中下級水兵たちだった。彼らは陸での生活を許されなかった軍人である。長江に浮かぶ艦船の中で寝泊まりした。それが、半ば強制的に陸上への配置転換となったのだ。

この河道での生活に慣れた膨大な数の水兵出身者が、馬新貽が暗殺されたころの江寧の城内を日夜警備していたのである。河から陸に移されたのは兵士だけではない。兵士の人件費もこれに合わせて河から陸へと動いた。漕運で集めた糧塩の保管庫が、馬新貽の江寧の糧台へと移動した。これによって甚大な権力の弱体化を余儀なくされたのは、いかなる政治集団であったか。

一八六三年初めに、礼部給事中であった卞宝第が次のような奏摺を書いている。「長江北岸には無数の匪賊が結集し、秩序を乱しているが、この中に安清道友を名乗る集団がある。その多くは安東県や清河県の遊民で、兵勇（民間兵）を騙り、長江下流域では、民衆の財貨を強奪する。それに加えて、李世忠が解散した軍営の庇護を受けているから、官吏も怖気付いて、なす術はない。⁸²」

安清道友は後に青幫^{チパン}として知られる秘密結社である。その起源は、曾國藩から軍権を剥奪された李世忠が、主に私

塩の密売で得た資金を使って、長江水師に勤める水兵や大運河で働く水手の間に組織した互助団体であった。この安清道友の活動は、京杭運河の杭州から始まる四番目の埠頭を取り巻く、江蘇淮安府の安東県と清河県を中心に、北は宿遷、徐州から、南は高郵、揚州、瓜州までを含む広い範囲に及んでいた。⁸³ 李世忠の動かす資金がどれほど莫大な金額であったかは、勝保を継いで李のパトロンとなった曾國藩の記述が雄弁に語っている。

太平天国崩壊の直前の同治三（一八六四）年には、湖北、湖南、江西の塩に掛かる税金は、長江の下流と上流の総督、巡撫、提督の管理下に入ったと言う。長江下流では都興阿、馮子材、李世忠の部隊が三等分し、上流では官文と自分（曾國藩）が二分した。つまり長江沿いで集めた塩税の五分の一が李世忠の自由な裁量に任されていた。⁸⁴ また、この年の十二月一日に李世忠に宛てた曾國藩の書簡は、太平天国の残党を追う戦争に必要な戦費を、李世忠が塩税の中から急遽工面したことへの感謝の意を表している。李世忠がこのとき献金した総額は「銀三十万串」であった。⁸⁵

「豫勝營」を解散させられた李世忠は、揚州に居を構えた。しかし、依然として捻匪時代の拠点であった安徽と河南の境界に要塞を築き、武器を私蔵して、長江水師の軍人たちを陰で操作し、私塩に係る税金のピン撥ねをしていた。馬新貽の再編案に、彼が黙って従うはずはなかった。その意味で、一八六九年に太湖水師の哨勇を蘇州親兵營の責任者が殺害した事件は、長江水師と両江総督を巡る権力闘争の暗い行方を示唆する不吉な信号だった。北京の王家璧が、この事件を馬新貽暗殺と結び付けたことは慧眼であった。

張汝詳の供述書には、一八七〇年八月二二日の暗殺事件直前の彼の行動記録がある。それによれば、張は、七月七日に湖州の新市鎮から船に乗り、太湖を北東へ縦断して、翌八日午後、蘇州で船を降りた。蘇州からは、京杭運河が江寧まで通っている。彼は蘇州に一泊し（その場所は書かれていない）、九日に蘇州からまた船に乗った。江寧の波

止場到着は七月一六日。江寧城内に入ったのは翌一七日である。以後、殺害を敢行した八月二二日までの四十日近い彼の行動は全く知られていない。⁸⁶

七月二六日付け軍機処上諭檔にある通り、天津教案で強硬な意見を主張したフランス公使のロッシユアルが自らの艦隊と共に上海に向かうという情報が流れ、黃浦江とその上流一帯には嚴戒態勢が敷かれていた。⁸⁷この時期、京杭運河を使つて国内を移動する人々は、厳しい身元調査を避けては通れなかったであろう。しかし、張の湖州から江寧への道中には波風は全く立っていない。強力な庇護者に渡航の安全を守られていたと見える。張が移動したのは太湖水師が管轄する空間に他ならない。そこは李世忠の影の独立王国だった。張汶詳と李世忠の接点をここに見出すことができるのである。

十 曾國藩は何時、事件の真犯人に気付いたか

我々は、張汶詳と李世忠が、太湖と京杭運河を通じて氣脈を通じ合う現場によりやくたどり着いた。張汶詳の事件の真犯人は、曾國藩が庇護せねばならない人物あるいは派閥ではあった。しかし、湘軍の関係者ではなかった。これが我々の作業仮説であった。馬新貽の諸政策が、長江水師再編計画に典型的なように、湘軍の勢力削減を意図することを明確に示すものだとしても、暗殺といった手段で馬新貽を排除することは、湘軍関係者には考えられないことであつた。そのような軽率な行為は、湘軍を指揮する曾國藩をさらなる政治的窮地に陥れるであろう。

李世忠は「豫勝營」という独立師団の長であつた。「豫勝營」は曾國藩に統帥されたが、湘軍の直接の指揮系統に

は属していない。曾國藩の予備軍団という位置付けであった。これらは張汶詳事件の「首謀者」の成立と件を満たしている。馬新祐が年譜で兄の人生に重大な影響を与えた人物の中で、張汶詳と並んで、李世忠の存在を抹消したことには十分な理由がある。

同治三（一八六四）年初めに解散を命じられて以来、李世忠と曾國藩および湘軍との直接的関係は、少なくとも表面上は完全に絶たれていた。しかし、それはあくまで表面だけの事柄に過ぎなかった。馬新祐が暗殺された直後の九月三日、曾國藩は、故郷の湖南瀏陽に隠棲している九弟の曾國荃に、手紙を送っている。⁸⁸ 馬新祐を話題にしたものであるのは間違いない。この書簡は何故か今に残されていない。ところが、曾國荃が同じ時期に曾紀澤に宛てた書簡には、馬新祐刺殺事件を強く暗示する一節がある。

湖南で郷試が実施され、多くの合格者が今度は江南での試験に臨むという話柄の後に、こう書かれている。「私は最近、旅行店を開いたのだが、我が湖南の儒学紳士や士人、一般民衆がここで道を尋ねるのは、一時の流行に過ぎないようで、それは湖南の人々の気持ちが変わり易く、湖南がどっしりと落ち着けない証拠だと思う。近頃、李世忠が造反を企んでいるという噂があるが、そんなことはない。湖北で起こったデマなのか、それが北風に乗って湖南まで吹かれてきたのかどうかは分からないが。」⁸⁹

この手紙の日付は九月二三日である。現在見ることでできる事件関係資料の中で、李世忠に最も早く言及したものだ。李世忠は八月二二日の暗殺事件前後に、湖北に現れたようである。その場所は、私塩取引に関連して李が事務所を設置した漢口であったと思われる。曾國藩は、この手紙の内容を息子の紀澤から伝達されたであろう。しかし、このとき曾國藩が関心を持っていたのは、湖南における哥老会の叛乱が馬新祐の暗殺に関係するか否かであった。國荃

の李世忠への言及は、国藩の心には、この時期まだ十分に届いていない。

一〇月一四日、国藩は、江蘇候補道の孫衣言宛ての手紙で、孫の上司である馬新貽への哀悼の意を表明した。孫衣言は国藩の幕僚だが、馬新貽暗殺事件の最終調査の内容に不満を訴えその署名を拒否した人物であった。この手紙は、暗殺事件勃発当初、国藩が事件をどう見ていたかを良く示すものである。

穀山制軍は温和公正で、財政を整理して両江に繁栄をもたらしたのに、このような不測の災いに遭われるとは！

日常の政治に臨む姿勢は模範とすべく、また顕彰すべく、小生のもとより敬慕するところでした。書簡にも見識ある意見を述べられ、有り余る所見を語り尽くさないでは止まないという姿は誠に敬服に値するものでした。穀山将帥が刺殺されてから、魁玉將軍と英翰中丞が前後して奏摺を發したそうですが、弊所は江寧から遠く、まだその内容を拝読しておりません。朝廷による追悼の儀式は誠に莊重なもので、それを論評する立場にはありません。先に袁端敏（袁甲三）公が急逝された際、その遺族の方々（袁保慶を含むものだろう——引用者注）から端敏公の事蹟を讃える碑文の執筆を依頼されましたが、まだ執筆に至らないうちに、恩旨を受け取ったことは弁解の言葉もありません⁹⁰。

曾國藩はここで暗殺事件を「不測の災い」と表現している。馬新貽の善政への高い評価は、馬新貽が捻軍と通じた暗い過去について国藩が全く無知であったことを、かえって浮き彫りにする。

「不測の災い」という事件への印象を胸に、曾國藩は、江寧赴任の前に、天津教案の経過報告を行うため、京師へと出發した。一〇月一七日のことだった。

十〇月一九日、曾國藩は、紫禁城の養心殿の東の間にて、皇太后（西太后）に謁見した。日記にはそのときのやり取りが記されている。

「馬新貽のこの度の件は、まことに不測の事態でした。」

「この事件はまことに不測の事態であります。」

「馬新貽の政治は全く申し分ないものでした。」

「いかにも、彼の政治は沈着かつ緻密でありました。」⁹¹

まるで、國藩が孫衣言に宛てた手紙を読んだかのように、西太后は、暗殺事件を、國藩と同じように「不測の」出来事と呼んだ。馬新貽の治政への高い評価についても、二人の意見は一致した。

一〇月二七日、京師で劉銘伝より、長江水師に弊害が噴出していることを知る。⁹²この日、金陵書局にいた幕僚の張文虎が、湖南の衡州、湘鄉、湘潭で匪賊（哥老会）の叛乱が起ったことを記した。また、江北郷試に参加した武生が私塩を略奪、逮捕を逃れようとして二名が殺害されたことも書いた。⁹³

一月七日、曾國藩は三週間に及ぶ京師滞在を終え、江寧への行旅に就いた。

一月一五日、直隸と山東の境界にある德州に滞在。ここは天津教案の折、陳國瑞が天津に向けて出発した起点である。國藩は、弟の國荃が、湖南の衡州、湘鄉、湘潭で起った哥老会の叛乱の鎮圧に向かったが、苦戦していることを知る。

一月二日、国藩は清河県の清江鎮から京杭運河に乗り入れた。

一月二五日、国荃からの手紙で、哥老会の叛乱が無事鎮圧されたことを知る。

一月二八日、韓莊閘に停泊。欧陽利見と会った。利見は漕運総督の張之万が、張汶詳事件の調査を指揮するため江寧に発った後、清江関の本部の留守を預ることになった長江水師の淮揚鎮総兵。この日、清江浦から、近況を知らせに駆け付けたのである。

欧陽利見との長い会話には、息子の紀澤たちも後から加わった。曾國藩の張汶詳事件に対する姿勢は、この談話後、大きな変化を遂げる。

一月二九日、彼は日記に、「本日、江寧の馬制軍刺殺事件は、解決の目処が立ったことを知った」と書く。⁹⁴ この日も彼の元を訪れた欧陽利見から、張之万の特捜部による調査の途中経過を確認したのである。張之万の第二調書の提出は一月一三日だが、その概略を国藩は欧陽利見を通じてこの日知るに至った。

張之万の第二調書によって事件の全貌は明らかになったと、国藩は考えたようである。この第二調書は、張汶詳が太平天国の元軍人であったという第一調書の情報に加えて、張の浙江海盜集団との関係や、呉炳燮による妻の強奪、馬新貽への直訴と却下といった新事実を追加したものであった。国藩は、これで事件の謎は解けたと考えたのである。

一月二日、国藩は幕僚で文書起草を担当する陳克臣、程鴻詔、錢応溥に緊急の手紙を送った。張汶詳が確かな自供を出したので、この事件はまもなく結審するだろう。江寧に着き次第、あなた方に指示を出したい、と幕僚たちに伝えたのである。⁹⁵ 錢応溥は、天津教案の最中、国藩が心臓麻痺で人事不省に陥って以来、国藩の原稿の代筆を一手

に引き受けていたゴースト・ライターであった。

対照的に、宮廷では張之万の第二調書は不評であった。事件には首謀者が必ずいる、首謀者逮捕まで捜査の手を緩めるなどというのが宮廷の考えだった。この情報は一月二三日に公表された。その直前の一日日には、元江蘇巡撫の丁日昌が事件の首謀者だとする王家璧の弾劾がなされている。しかし、それらに接しても曾國藩の考えは些かも揺るがなかったのである。

張之万は、第二調書は「最終結論とするには程遠い」⁹⁶と書き、捜査結果に再考の余地があることを仄めかした。しかし、曾國藩の意識において事件はすでに終わっていた。

張之万は漕運総督として、安清道友の根拠地、清河県の清江浦にて、李世忠たちの地下活動を監視する立場にある。その彼は、第二調書において、張汶詳の履歴から、白旗捻軍総目、龔得樹の部下として手を染めた塩の密売を切り離して、張の前歴を浙江沿海部の海盜集団とだけに結び付けた。曾國藩はそうした処置を支持した。張之万は湘軍の幹部ではない。むしろ、多くの場面で曾國藩とは反対の陣営にいた。馬新貽を重要ポストに抜擢することに努め、長江全域を支配した湘軍を牽制することに最も熱心な官僚の一人だった。

ところが、馬新貽が白昼に暗殺されたことで、張之万は、湘軍やその後方支援部隊の脅威を改めて痛切に意識した。今回の事件は、安清道友の広範な連絡網と莫大な資金源があつて初めて可能になったテロリズムである。下手をすれば、今度は自分が血祭りに挙げられる危険があつた。欧陽知見は、張之万のこの心中を國藩に伝達したのである。

李世忠の「豫勝宮」はもはや存在しない。しかし、同治三年以後も、李世忠は依然として湘軍の屋台骨を支える重

要なパートナーだった。李世忠の馬新貽暗殺事件への関与を示唆するいかなる痕跡も調書の中に残してはならない。その暗黙の合意において、張之万と曾國藩という二人の政敵は暫時の同盟を結んだ。

二月一四日に江寧の職務に復帰してから、張汝詳についての審議を終え、彼を凌遲刑に処する一八七一年四月四日まで、曾國藩は、事件の真相を究明し、事件の首謀者を追跡するいかなる方策も採らなかったのは確かである。しかし、それは迷宮入りした事件に途方に暮れたためではなく、第二調書の物語の中に捜査を落とし込むための極めて自覚的な行為であった。

しかし、四月四日で事件は終わらなかった。わずか四日後の四月八日、江寧の曾國藩の衙門に、張得勝に連れられた李世忠が姿を現したのである。

十一 李世忠、陳國瑞の怨恨闘争事件が意味するもの

「李世忠が面会を求め、張得勝に伴われて来た。かつては天下に痛罵され、近時は軍団を解散し郷里に帰っていた。身の収め方を熟慮するなら、五体満足のままその生を終えることができる！」⁹⁷

李世忠と國藩を訪れたこのとき、張得勝は長江水師の呉城宮右哨の二隊千総を、病気を理由に引退したばかりだった。⁹⁸李世忠と七年振りに言葉を交わした後、國藩は李世忠が「五体満足のままその生を終える」ことを願わずにはいられなかった。しかし、その願いは裏切られた。

一八七一年六月一日早朝、李世忠は揚州の陳国瑞の寓居に潜伏し、部下に命じて、陳を縄で縛って船に乗せ、揚州の四里鋪まで連行、船の中に監禁して、その所有物を奪い、これまでの私怨を晴らそうとした。ちょうど、そこへ鉛を積んだ船が百艘余りと、長江を往来する湖広の船舶が兩岸に集まった。陳国瑞と同郷の無頼たちであった。陳の甥の陳澤培が、知らせを聞いて駆け付け、陳国瑞を救った者には、一万両を越える賞金を送り、李世忠を捕えた者にも一万両を与えると言った。こうして船舶の水手や近隣の匪賊が数千人結集して、その叫び声は天を震わせた。李世忠は情勢不利と見るや、陳国瑞を船に監禁したまま、長江の上流に人を遣り、小舟を探して逃げ出そうとした。ところが小舟は追っ手に阻まれ、李は河に落ちて救いを求めた。李の輜重や家族を載せた小舟も、水手と匪賊に一日深夜、拿捕された。召使と妾の四人が、岸に逃れたが、一人は水没して行方不明となり、残る三人も揚州に連行され、殴打暴行された。揚州の経営務処の候補道、楊鐘琛が現場を押さえて、ようやく三人は身柄を解放された。事件は揚州および瓜洲営汎に通報され、两江総督、曾國藩が事件を捜査することになった。

六月一日に武闘という破局を迎えるに至ったそもその原因は、揚州の李世忠の邸宅を、陳国瑞が五月初めに、ひよっこりと尋ねてきたことに依る。李と陳は、同治二年に馬新貽が籠城する蒙城を解放するために進駐した際、殺し合いの内紛を惹起してからずっと大猿の仲であった。ところが、不思議なことに、今回の陳の突然の訪問を、李は熱烈に歓迎した。李が抱える私設演劇団の芝居を、陳は毎晩鑑賞し、昼は昼で、二人が肩を抱き合って通りを闊歩する姿が目撃された。もちろん、李世忠は陳を油断させるために友情を偽装したわけだが、陳の揚州訪問自体が大きな謎であった。

曾國藩は事件を六月三日に知った。四日、李世忠が揚州から江寧の衙門まで来て、曾國藩に助命を求めたが、國藩

は面会を拒絶し、袁保慶に対応を委ねた。⁹⁹

曾國藩の調書は六月二八日に出された。李世忠は全ての官職を剥奪され、河南の籍貫地に強制的に送還されることになった。陳国瑞は浙江処州鎮総兵から二級降格して都司とし、湖北の籍貫地に送還、やはり揚州への出入りを禁止された。李は官職から永久に追放され、陳は官職に何とか踏み止まった。¹⁰⁰

事件は確かに、李世忠の方がまず陳に姦計を図ったものだ。しかしながら、陳国瑞はそれに対して財貨強奪、殴打暴行という違法行為に訴え、李世忠の家人の溺死にも間接的な責任を負っている。曾國藩の下した判決は明らかに李世忠に重く、陳国瑞に軽い。この不可解な判決事由を説明する過程で、曾國藩は、李の旧悪のみならず、國藩自身がこれまで李世忠を陰に陽に庇護してきた事実を明るみに出すことを余儀なくされた。

最大のスキャンダルは、一八六八年の揚州教案に関するものである。ベルテミー協定を盾に、曾國藩は、外国人宣教師が揚州政府に無断で中国人不動産業者から教会用の土地を貸借したことを非難した。しかし、どういうわけか、外国人宣教師に土地を貸し付けた中国側の土地所有者を糾弾することはなかった。李世忠の旧悪を暴く中で、曾國藩はハドソン・テイラーに教会敷地を提供したのが李世忠その人であったことに言及せざるを得なくなった。¹⁰¹

李世忠から官職を奪い、河南の籍貫地に戻れというのは、虎を野に放つことに等しいと、関係者は危機感を持った。不安を覚えた軍機処は、李と陳に対する判決には同意する一方で、李世忠の今後の動静について継続的にその途中経過を報告するよう、河南と安徽の各巡撫に求めた。

河南巡撫の李鶴年と安徽巡撫の英翰は報告書を提出した。革職後、李は商城の県境の鎖口に移り住んだ。まだ騒ぎは起こしていないと。

軍機処はこれら地方巡撫の報告の真偽を確認するため、曾國藩に再調査を命じた。

國藩の調査結果は一八七二年一月九日（同治十年十一月二十九日）に出された。

前皖南鎮總兵の劉啓發は六安州の出で、そこは李世忠のいる霍邱県に近い。一八七一年の二月一二日、劉啓發は固始県に向き、李の拠点に近い洪家集、姚女廟などを調査した。二三日、顧家店や葉家集で、庶民に聞き取りもした。七月頃までは、金陵から帰郷して、騒ぎを起こすだろうという噂が絶えず、彼に造反を囑ける動きもあったが、本人が取り合わないで、村は今では落ち着いたようだ。二四日、葉家集から淮河を越えて霍邱県の人、呉海門に会った。李の近況にたいへん明るいので、李のお墓参りだと言って、李の近辺を探った。その田畑が広大だというから見せてもらいたいと申し出て、呉と一緒に李の家に行くと、老楼という地名で、住宅が一つ、瓦葺、草葺の建物が全部で二百余り、周囲は竹籬を植え水道に囲まれ、正面に橋を架ける。正面玄関に「知足者常樂、能忍者自安」とある。洋式大砲は見当たらない。第二玄関に石工が歴代祖先の墓標を刻んでいる。最上階の部屋では三人の塾教師が親族や貧民の子弟三、四十人に經書を教え、塾代ばかりか子供たちの衣服代も李世忠が持つと言う。大邸宅の周囲に四つの村落がある。部屋はそれぞれに数十あり、李世忠の一族が住む。米価が低廉なので、李は十キロ先の紅花地に新しく二十ばかりの家を建て、製紙工場を造った。その夜は、李の邸宅に泊まり、翌日は周囲を調査した。数キロ行つたところで、趙光和という男が李の手紙を持ってきた。製紙工場に案内すると言ったが、密偵の任務を考え、断つた。それから八里灘という地方を調査した。捻軍の殘党を匿ったり、馬夫を殺害したという噂の真偽を確かめた。誰もそんなことは聞いていないと言う。造幣所は同治初年に廢業した。田畑は二千数百頃もない。妻妾を二十六人も囲っていない。長男を喪い、二人の孫も死んで、今は三人の子供だけである。

劉啓発の調査結果を整理した上で、曾國藩は、こう結論付けた。李世忠に造反の兆候はない。要塞の建築や、武器の私蔵もなく、住宅の増築や、製紙工場の設置は、亡命者を隠匿することを目的としていない。劉啓発が趙光和から託された李世忠の手紙は恭順の意を示すもので、全てが本意とは言えないにせよ、首領の地位を保つのに汲々たる心情は哀れであり、今後定期的に調査して、その造反の芽を事前に摘み取りたい。¹⁰⁰

調査員の劉啓発の前に呉海門や趙光和が現れたところを見ると、李世忠は官憲の調査に対して然るべき準備をして臨んだことが判る。急ごしらえで揃えた塾教師の前で三、四十人の子弟に経書を朗唱させた。村人は李世忠がとても静かだと証言した。捻軍の残党を匿ったり、平民を殺したり、贖金を作ることはないと太鼓判も押した。全てが芝居であることは報告を書いた曾國藩も、報告を受理した軍機処も、いずれも了解済みのことであった。

こうして、李世忠、陳国瑞の怨恨闘争事件は、馬新貽暗殺事件、あるいは天津教案と同様の軌跡を辿って、物事の本質には一指も触れることなく、諸悪の根源にも全くメスを入れないまま、歴史の表層を通り過ぎていった。

李世忠が、張汶詳の処刑された四日後に國藩を尋ねたのは、馬新貽刺殺の「首謀者」として國藩が自分を告発しなかったことに謝意を表するためである。しかし、李世忠が馬新貽の暗殺を使喚したという情報は北京の宮廷も把握していたと考えられる。醇郡王奕譞は一八七一年一月一〇日（同治九年十一月二十日）、再び、排外攘夷を鼓吹する奏摺を發した。¹⁰¹ 総督巡撫への監視の目が厳しくなる中、奕譞の意を体した陳国瑞が五月に揚州を訪れ、馬新貽暗殺事件を廉に李世忠を脅迫するに至った。李は最初こそ陳を自宅に受け入れ、その要求に唯々諾々として従った。しかし、その忍耐が限界を越えたとき、六月一日の闘争が爆発した。その後、馬新貽暗殺事件の真相を全てばらすと言つて、李世忠が國藩を脅したのである。

李世忠の近況に関する家宅捜査が始まる直前の九月二十六日から十一月一八日まで、曾國藩は五十四日に亘って生前最後の軍隊觀閲を行った。

それは、江寧督標、練軍、湘軍に始まり、揚州、清江浦、徐州、丹陽、常州、常熟、蘇州、松江など長江下流の全軍営に及ぶ大規模なものだった。

曾國藩の健康状態は最悪であった。右目が失明した上に、左目の視力もほとんど無くなっていた。炎天下の中、長時間の觀閲に耐えられないときは、梅啓照と袁保慶が代わって指揮を取った。梅啓照と袁保慶は、それぞれ江寧布政使、山東候補道として、馬新貽暗殺事件の特捜部の一員だった。袁保慶に至っては、その最終判決書への署名を拒否した。しかし、この度の觀閲において、袁は國藩の代理を黙々と勤めた。喻吉三のような子飼いの湘軍幹部でさえ李世忠の勧誘に屈した。どれだけの湘軍兵士が、安清道友に、哥老会に内通していることか。曾國藩は、わずかに感じ取れる光の中で、湘軍や長江水師の世界から、李世忠の影を永久に追い払おうと懸命であった。

觀閲の最中の一〇月一〇日の日記に「付記」という覚書があつて、そこに興味深い記事が残されている。

李（王）顕発、李世忠の義子（李の軍団に長く勤務し、官に推挙された。颯爽とした男で武術に長ける。安徽青陽の人。漕標中軍副将¹⁰⁶）

李世忠は河南の固始県に追放となつたが、その養子である李顕発を、曾國藩は漕標中軍に残したのである。父の世忠が長年関係した塩を積んだ漕運船の安全を守る直轄部隊である。「身の収め方を熟慮するなら、五体満足のままそ

の生を終えることができよう！」曾國藩は、この「付記」を書きながら、李鴻章にもそう呼び掛けていたのかもしれない。

十二 死後の伝説

一八七二年三月一二日、曾國藩は心筋梗塞により執務中に急逝した。享年六一歳。

曾國藩の死後、陳國瑞と李世忠の没落は急であつた。

陳國瑞は光緒元（一八七四）年、再び揚州に現れた。徐州鎮總兵の詹啓綸を嗾け、監生の胡士礼を毆殺し、甌江總督の沈葆楨に逮捕された。黒龍江での軍事服役を命じられ、光緒八（一八八二）年、その流刑地で死んだ。しかし、まもなく劇的な名誉回復を遂げる。光緒二十（一八九四）年、湖広總督の張之洞（張之万の従弟）がその戦功卓拔をもつて、郷里の浙江処州に專祠を建てることを建議し、了承されたのである。若き頃、太平天国の戦士であつた陳國瑞の生涯は、『清史稿』では卷四百二十八、列伝二百十五の中に、『清史列伝』では卷五十六、大臣画一伝檔後編十二の中に、英翰、鮑超、傅振邦、鄭國魁と並んで収められている。

光緒七（一八八一）年、李世忠が安徽巡撫の裕祿に逮捕、殺害された。宴会に招待されたところを襲われたのである。裕祿は、曾國藩が同治二年十二月二十日（一八六四年一月二八日）に記した、「一つは心の動きを測り難く、もう一つは利を求める余り民を傷付ける」という革職事由によつて李を処刑した。しかし、彼の義子、李鴻章はその処分に納得しなかつた。彼は李洪と名を変え、安清道友と哥老会の連合戦線を結成することを目指し、自ら哥老会員

となった。

光緒十七（一八九二）年八月、李洪は長江一帯の哥老会を動員して、湖北の沙市と安徽の安慶で同時蜂起する計画を立てた。義父の李世忠の名譽回復が目的だった。この蜂起はアメリカ人として初めて哥老会会員となったチャールズ・メイソン（Charles A. Mason）が香港から武器彈藥を調達して参加したことで知られる。しかし、蜂起は失敗した。十二月、李洪は妻と共に獄中で服毒自殺し、四十年に亘って河南、安徽、江蘇に君臨した李世忠の地下王国は崩壊した。¹⁰⁷

光復会の領袖の一人、陶成章が、李世忠の創生した安清道友を「安慶道教」と呼んで教門に列し、李洪が連携を図った哥老会を、太平天国の李秀成や李世賢が湘軍の中に投じた天地会の後身と見る「教会源流考」を書いたのは一九〇八年だった。「安慶道友」とは青帮の一派、「安清道友」の別称である。清末官憲の調査報告は、李世忠や李洪を受け継ぐ帮（¹⁰⁸）を、江蘇清帮大字輩の徐宝山の集団に比定した。李世忠と李顕発の数奇な運命は、正史ではなく、秘密結社の歴史の中に記憶され、現代まで続く革命の源流に位置付けられることになった。

- 1 李慈銘「閏六月十九日至二十三日京報」、同『越縕堂日記』第七冊、広陵書社、二〇〇四年、四七七九～四七八一頁。この著名な文人は、事件当時、馬新貽の幕僚であつた。
- 2 魁玉「江甯將軍魁代呈遺疏」(同治九年七月廿八日)、王錫蕃校、譚鐘麟刻『馬端敏公(新貽)奏議』(以下、『奏議』と略)、近代中国史料叢刊続編第十八輯 171(沈雲龍主編)、文海出版社、一九七五年、八六七頁。
- 3 「上諭」(同治九年八月三日)『穆宗毅皇帝実録』(以下、『実録』と略)卷之二百八十八、中華書局、一九八七年、九七八～九八〇頁。
- 4 「上諭」(同治九年八月十日)、同右、九八九頁。
- 5 魁玉「覆陳研審張汶詳大概情形」(同治九年八月廿九日)、『軍機檔』第二七六箱、第四六包、第一〇三〇〇号、唐瑞裕『清代吏治探微』文史哲出版社、一九九一年、一八一頁より転引。
- 6 「魁玉張之万摺」(同治九年九月十八日)、前掲『清代吏治探微』一八二頁。
- 7 「上諭」(同治九年九月二十七日)、『実録』卷之二百九十一、一〇二八頁。
- 8 張之万「審明謀殺制使匪犯情節較重請比照大逆問擬並將在案人犯分別定擬罪名」(同治九年閏十月二十一日)、『奏議』八七六～八七八頁。
- 9 「上諭」(同治九年十一月初二日)、『実録』卷之二百九十六、一一二〇頁。
- 10 「上諭」(同治九年八月十日)、『実録』卷之二百八十八、九九〇頁。
- 11 鄭敦謹、曾國藩「覆審凶犯行刺馬新貽緣由仍照原擬分別定擬摺」(同治十年正月二十九日)、『曾國藩全集(修訂版)』(以下、『全集』と略)第十二冊、岳麓書社、二〇一一年、一九二～二〇〇頁。
- 12 「鄭敦謹」趙爾巽等撰『清史稿』卷四百二十一、列伝三百八、中華書局、一九七七年、一二一六六～一二一六七頁。
- 13 「上諭」(同治十年二月六日)、『実録』卷之三百四、三八～三九頁。
- 14 『清通鑑』卷十六(穆宗同治三年起穆宗同治十二年止)山西人民出版社、二〇〇〇年、七一〇七～七一〇八頁。
- 15 同右、七一〇九頁。
- 16 「日記之四」(同治七年)九月二十日、二十一日、十月二十九日、十一月初二日、初四日、『全集』第十九冊、九七、一〇九～一〇三頁。

- 17 「日記之四」(同治七年) 十二月十三日、『全集』第十九冊、一二五頁。
- 18 「日記之四」(同治八年) 正月初五日、『全集』第十九冊、一四一頁。
- 19 「奕譞奏敬陳管見摺」(同治八年正月乙亥)、『籌辦夷務始末』(同治朝) (以下、『始末』と略) 第七冊、中華書局、二五八九
 一五九一頁。
- 20 同右、二五九〇頁。
- 21 「奕譞等奏遵旨會商妥議覆奏摺(附六條)」(同治八年正月己卯)、『始末』第七冊、二五九四頁。
- 22 同治八年己巳正月初五日、陳義傑整理『翁同龢日記』第二冊、一九八九、六七一頁。
- 23 「醇賢親王奕譞載澧」、『清史稿』卷二百二十一、列傳八、九一〇七、九一一一頁。
- 24 唐瑞裕『清季天津教案研究』文史哲出版社、一九九三年、三一、三九頁。
- 25 「奕譞奏陳國瑞被誣請飭回京摺」(同治九年六月壬戌)、『始末』第八冊、二九六二、二九六三頁。
- 26 「崇厚奏法水師提督京都伯理到津會國藩觸發旧疾求派重臣摺」(同治九年六月癸亥)、『始末』第八冊、二九六八、二九六九頁。
- 27 「廷寄」(同治九年六月癸亥)、『始末』第八冊、二九七二頁。
- 28 「日記之四」(同治九年) 七月二十五日、『全集』第十九冊、三四〇頁。
- 29 「王家壁覆陳馬新貽被刺一摺着曾國藩等悉心推鞠務得確供等事」(同治九年十二月初十日)、『全集』第十二冊、二〇四、
 二〇五頁。
- 30 馬新貽「營弁勇丁滋事釀命審明議擬摺」(同治九年六月初八日)、『奏議』卷八、八四五、八五四頁。
- 31 『奏議』卷八、八五九、八六六頁。
- 32 「日記之四」(同治九年) 七月二十五日、『全集』第十九冊、三四〇頁。
- 33 「法使羅淑重照會」(同治九年八月丙申)、『始末』第八冊、三〇三七、三〇三八頁。
- 34 「日記之四」(同治九年) 八月初一日、『全集』第十九冊、三四二頁。
- 35 同治九年庚午十月朔、前揭『翁同龢日記』第二冊、八〇四頁。
- 36 「廷寄」(同治九年八月癸丑)、『始末』第八冊、三〇七五、三〇七六頁。
- 37 「著阿江總督曾國藩照所擬辦理津案第一批訊確人犯事上諭」(同治九年八月二十五日)、中国第一歴史檔案館、福建師範大

- 学歴史系合編『清末教案』（以下、『教案』と略）第一冊、中華書局、一九九六年、九一五～九一六頁。
- 38 「陳国瑞親供」（同治九年八月二十八日）、『軍機処檔』第一〇二八二九号、前掲『清季天津教案研究』一一一～一二二頁より転引。
- 39 「威妥瑪先生致格蘭雅爾伯爵文」（北京一八七〇年一〇月一二日）、『教案』第六冊、二〇〇六年、五〇九頁。
- 40 張燾『津門雜記』（光緒十「一八八四」年游芸山莊藏板）卷中「混星子」、近代中国史料叢刊第五十七輯565（沈雲龍主編）、文海出版社、一九七〇年、一九八頁。
- 41 同右、『津門雜記』卷上「水会」、一〇九～一一一頁。
- 42 「曾國藩崇厚奏查明天津滋事大概情形摺」（同治九年六月庚申）、『始末』第八冊、二九五五頁。
- 43 前掲、鄭敦謹、曾國藩「覆審凶犯行刺馬新貽緣由仍照原擬分別定擬摺」（同治十年正月二十九日）、『全集』第十二冊、一九二～二〇〇頁。
- 44 『滿洲實録』卷二、乙酉歲至戊戌歲萬曆十二年至二十六年、丙戌歲七月、中華書局、一九八六年、六三～六五頁。
- 45 『高宗純皇帝實録』卷之三百三、乾隆十二年十一月十七日、中華書局、一九八五年、九六〇頁。
- 46 莊吉發『清代天地會源流考』国立故宮博物館、一九八〇年、一〇二～一〇四頁。
- 47 以下、太平天国の戦史に関する記述は、全て郭廷以『太平天国史事日誌』第二版、台湾商務印書館、一九六五年に基づく。
- 48 馬新貽「黃巖鎮總兵巡洋遇害巨寇殲擒請卹請獎摺」（同治五年正月初六日）、『奏議』卷三、二一九～二二四頁。
- 49 錢実甫編『清季重要職官年表』中華書局、一九五九年、一三八頁。
- 50 『奏議』卷一、二五～二六頁。
- 51 この手紙は残されていないが、以下の奏摺の記載に基づくものだろう。左宗棠「連城漳州勦賊獲勝情形摺」（同治四年正月初四日会福建巡撫徐宗翰銜）、『左宗棠全集』第三冊、奏稿卷十二、上海書店、一九八六年、二〇〇七～二〇一六頁。
- 52 馬新貽「官軍攻克南田匪壘生擒首要各犯摺」（同治四年十月初七日）、『奏議』卷二、一五七～一六二頁。
- 53 馬新貽「巨匪狀官擒獲首夥各犯訊明正法請卹摺」（同治五年七月初十日）、『奏議』卷三、二九七～三〇一頁。
- 54 以下の叙述は、前掲、『清通鑑』卷十六、七〇八九～七二二五頁を参照。
- 55 「陳国瑞」、王鍾翰点校『清史列伝』卷五十六、大臣画一伝檔後編十二、中華書局、一九八一年、四四三～四四三三頁。

- 56 「上諭」(同治八年四月十九日)、『実録』卷之二百五十七、五七五頁。
- 57 「尹耕雲」、前掲、『清史稿』卷四百二十三、列伝二百十、一二二〇一頁。
- 58 「上諭」(同治八年十月二十六日)、『実録』卷之二百六十九、七三七頁。
- 59 曾國藩等「遵旨嚴拿二字会匪及酌議会哨章程摺」(同治八年七月二十一日)、『全集』第十一冊、一九〇二〇頁。
- 60 「上諭」(同治八年十二月二十二日)、『実録』卷之百七十三、七八六〇七八七頁。
- 61 曾國藩「花馬池直兵遣撤所有山西省原派之固本餉銀改解部庫片」(同治八年十二月十四日)、『全集』第十一冊、一三八〇三九頁。
- 62 「馬新貽」、前掲、『清史列伝』卷四十九、大臣画一伝檔後編五、三八三五〇三八三六頁。
- 63 前掲、郭廷以『太平天国史事日誌』第二版、五七八頁。
- 64 馬新祐編『馬端敏公(新貽)年譜』(以下、『年譜』と略)、近代中国史料叢刊第三十三輯323(沈雲龍主編)、文海出版社、一九六九年、三八〇三九頁。以下の年譜に基づく記述では参照頁を逐一注記しない。
- 65 「引見新科進士」、『宣宗成皇帝実録』卷之四百四十二、道光二十七年五月五日、中華書局、一九八六年、五三四〇五三五頁。
- 66 「袁甲三」、前掲、『清史列伝』卷五十、大臣画一伝檔後編六、三九二三〇三九二四頁。
- 67 「年譜」三七頁。
- 68 「年譜」五二〇五三頁。
- 69 「上諭」(同治九年閏十月二十日)、『実録』卷之二百九十五、一〇八四〇一〇八五頁。
- 70 前掲、鄭敦謹、曾國藩「覆審凶犯行刺馬新貽緣由仍照原擬分別定擬摺」(同治十年正月二十九日)、『全集』第十二冊、一九四頁。
- 71 「年譜」五三頁。
- 72 曾國藩「覆馬新貽」(同治二年十月初九日)、『全集』第二十七冊、二〇二〇三頁。
- 73 王闕運「湘軍水陸戰記(即湘軍史)」卷九「臨淮篇」、近代中国史料叢刊第二十二輯217(沈雲龍主編)、文海出版社、一九六八年、一二八頁。
- 74 「曾國荃等奏」(光緒一六年閏二月五日)、『德宗景皇帝実録』卷之二百八十二、七五五頁。

- 75 「日記之二」(咸豐八年)六月初六夜記、六月十八日記、(咸豐九年)正月初一日、『全集』第十六冊、三〇〇、三〇六、三九八頁。
- 76 曾國藩「金陵寧國及皖南江西与江北上下遊近日軍情形勢片」(同治二年三月十二日)、『全集』第六冊、七六、七七頁。
- 77 曾國藩「諭吉三獎叙二品封典重覆請与撤銷併懇准賞加提督銜簡授總兵実欠片」(同治二年十二月二十七日)、『全集』第六冊、六四二頁。
- 78 曾國藩「密陳奉旨籌画安速辦理李世忠及其部衆一案片」(同治三年二月二十七日)、『全集』第七冊、七九、八〇頁。
- 79 曾國藩「長江水師責繁任重彭玉麟不能專駐安慶或兼顧陸路片」(同治三年八月二十七日)、『全集』第七冊、四三〇、四三二頁。
- 80 前掲、『清史稿』卷百三十五、志百十、「水師」、四〇二二、四〇二三頁。
- 81 『奏議』卷八、七七七頁。
- 82 「上諭」(同治元年十一月二十九日)、『實錄』卷之五十、一三八二、一三八三頁。
- 83 酒井忠夫「中国帮会史の研究 青帮篇」国書刊行会、一九九七年、二八六、二八七頁。
- 84 曾國藩「淮南塩運暢通力籌整頓摺」(同治三年正月十二日)、『全集』第七冊、二頁。
- 85 曾國藩「覆李世忠」(同治三年十一月初五日)、『全集』第二十八冊、二二九、二三〇頁。
- 86 前掲、鄭敦謹、曾國藩「覆審凶犯行刺馬新貽緣由仍照原擬分別定擬摺」、『全集』第十二冊、一九七頁。
- 87 「著阿江總督馬新貽迅速妥辦上海海口防範事宜事上諭」(同治九年六月二十八日)、『教案』第一冊、八三二頁。
- 88 「日記之四」(同治九年)八月初八日、『全集』第十九冊、三四四頁。
- 89 曾國荃「論紀澤侄」(同治九年八月二十八日)、『曾國荃全集』第五冊、岳麓書社、二〇〇六年、三三三頁。
- 90 曾國藩「覆孫衣言」(同治九年九月二十日)、『全集』第三十一冊、三八四頁。
- 91 「日記之四」(同治九年)九月二十六日、『全集』第十九冊、三五八頁。
- 92 「日記之四」(同治九年)十月初四日、『全集』第十九冊、三六〇頁。
- 93 陳大康整理『張文虎日記』上海書店、二〇〇一年、一三五頁。
- 94 「日記之四」(同治九年)閏十月初七日、『全集』第十九冊、三七〇頁。
- 95 曾國藩「覆陳克臣程鴻詔錢心溥」(同治九年閏十月初九日)、『全集』第三十一冊、四〇〇頁。
- 96 前掲、張之万「審明謀殺制使匪犯情節較重請比照大逆問擬並將在案人犯分別定擬罪名」(同治九年閏十月二十一日)、『奏議』

八七七頁。

97 「日記之四」(同治十年)二月十九日、『全集』第十九冊、四一七頁。

98 曾國藩「成愈卿等借補長江水師江陰營副將等摺」(同治十年二月初二日)「附名單」、『全集』第十二冊、二二四頁。

99 「日記之四」(同治十年)四月十七日、『全集』第十九冊、四三三頁。

100 曾國藩「李世忠陳國瑞尋仇構畔挾實參奏摺」(同治十年五月一日)、『全集』第十二冊、三四六～三四八頁。

101 事件報告は、李世忠が揚州のキリスト教会の土地所有者であることまで認めた。六月一二日の張之万宛ての手紙で、曾國藩は洪々借り手の名前がテイラーであることを白状したのである。曾國藩「覆張之万」(同治十年四月二十五日)、『全集』第三十一冊、四九六頁。

102 曾國藩「覆奏查明已革提督李世忠現在居家情形摺」(同治十年十一月二十九日)、『全集』第十二冊、四九五～四九七頁。

103 「奕譞奏瀝陳下情請振積習以救大局摺」(同治九年十一月辛亥)、『始末』第八冊、三三〇～三三三頁。

104 「日記之四」(同治十年)八月二十日、八月二十一日、九月初十日、九月二十日、九月二十二日、十月初六日、『全集』第十九冊、四六七～四六八頁、四七五頁、四七九～四八一頁、四八六～四八七頁。

105 「日記之四」(同治十年)八月二十六日、『全集』第十九冊、四七〇頁。

106 曾國藩「附陳籌商將李世忠調赴軍營片」(同治二年十二月二十日)、『全集』第六冊、六〇四頁。

107 劉錚雲「哥老会的人際網路——光緒十七年李洪案例的個案研究」『中央研究院歷史語言研究所集刊』第六十二本第一分、一九九三年、を参照。

108 「江蘇民變檔案」附照鈔徐懷札告示、附查探徐懷札報告、中国史学会主編『辛亥革命』第三冊、中国近代史資料叢刊、上海人民出版社、一九五七年、四〇三～四〇四頁。